２０２３年3月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１３日(月)、東京第一ホテル松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、前回の審議会での答申を受け「２０２３年度四国地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「２０２３年度四国地方向け地域放送番組編成計画」について説明があった。続いて、事前に視聴してもらった３月１０日（金）金曜夜７時台の各県域番組を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、４月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	半井　真司	（四国旅客鉄道 取締役会長）
副委員長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜ひめＤＯＮ！「“避難所生活”で考える～南海トラフ巨大地震～」
（総合　３月１０日(金)）について＞

○　松山局の小野文明アナウンサーが実際に１泊２日の避難所生活を体験し、行動を時系列に沿って説明していたため、避難所生活を身近に感じることができた。特に防災士の木藤容子さんが参加者の持ち物チェックをしている場面では、避難所の環境や季

節に対応できるように半年に１回は防災バッグを点検することが大切だと感じた。避難所生活では２１名の参加者がいたが、女性の防災士が参加者をまとめており、その活躍に焦点が当てられていたのがよかった。災害が起きたとき、行政や消防、警察の共助には限界があり、防災士が地域の防災にとって重要な存在であると実感した。また愛媛県は防災士の数が日本で一番多いと新聞で読んだが、なぜ防災士が多いのか気になったため、今後取材をしてほしい。瀬戸内海に津波が発生することは知らなかったため、大きな気づきになった。ほかの３県で放送した防災に関する番組も今後四国域内で放送してほしい。

○　瀬戸内海は地震発生から何時間もたってから津波が来ることを初めて知った。津波のシミュレーション映像は、実際の景色と合致していたため、子どもは恐怖を強く感じるかもしれないが、津波の危険性や安全確保の重要性を理解するきっかけになるとも思った。小野アナウンサーが避難所生活を実体験した映像からその大変さが十分に伝わったと思う。南海トラフ巨大地震を取り上げているため暗くなってしまうテーマだが、丁寧にその課題に向き合っていたことで、視聴者に勇気を与えていたと思う。東海大学の安部美和准教授は、熊本地震の避難所での実際の取り組みや経験に基づく説明をしていたため、非常に説得力があった。今回のように統計に基づく地震の被害予想を具体的に伝えることは重要だと感じたため、今後も視聴者の防災意識を高く保つようなコンテンツや情報を伝え続けてほしい。

○　避難所生活を体験している映像は、不自由さをよく感じられたと同時に、防災士の木藤さんのアドバイスがとても参考になった。また老若男女がバランスよく参加していたこともよかったと思う。避難所生活の映像を、スタジオの安部准教授が解説で補足していたのがよかった。発災からの出来事を時系列に沿って紹介していたため、何時間後にどの地域でどれくらい大きい津波がくるのかをイメージしながらみることができた。木藤さんが参加者の持ち物チェックをする場面があったが、実際に避難した際も行うのか気になった。続けて放送されていた「四国らしんばん」への流れが非常にスムーズで内容もまとまりがあり、違和感なく視聴できた。四国４県で防災について考えるという趣旨だったため、ほかの３県の防災番組の紹介があると、「ＮＨＫプラス」の誘導にもつながると感じた。

○　番組冒頭で「南海トラフ巨大地震の２０年以内の発生確率が６０％」という情報を地震のシミュレーション映像とともに紹介していたのは、震災に対する危機意識を喚起させるのに効果的なオープニングだったと思う。小野アナウンサーが避難所生活を自ら体験してリポートしており、特に寝床や食事に対して感想を述べていた場面では、ことばや表情から避難所生活の困難さが十分に伝わり、自分事として捉えることがで

きた。発災から避難までの様子、避難所設営やほかの参加者の様子などを伝え、その映像に熊本地震の避難所生活を実際に経験した安部准教授がアドバイスをするという構成は、説得力がありわかりやすかった。瀬戸内海で津波被害が出ることを知らない人も多いため、継続的な注意喚起が必要だと感じた。また、画面のＱＲコードから地震による被害想定を見ることができたが、番組でもその紹介があるとよかった。

○　南海トラフ巨大地震が発生したという設定で、避難所生活をシミュレーションしており、どのような場面で何が足りなくなるのかについて想像力を働かせながら見ることができ、防災意識を高めるのに効果的な構成だったと思う。特に木藤さんが参加者の持ち物チェックをする場面では、参加者だけでなく、視聴者にとっても防災バッグを改めて見直すきっかけになったと感じる。自治体が定める避難所以外に、地域住民が避難所を開設することが紹介されていたが､女性や子どもの視点を取り入れるため、避難所運営に若い世代が積極的に関わることが理想だと感じた。一方で現代は共働きの世帯が多く、子育てをする世代の参加が難しいと思った。そうした若い世代の声をいかに避難所運営に生かしていくかは今後の課題だと思った。南海トラフ巨大地震について取り上げていたが、全体的に堅苦しくなく気軽に見られる雰囲気だったのがよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

防災を自分事として捉えるにはどうしたらよいか議論した結果、実際に避難所生活を体験するというテーマになった。また、避難所生活をどこまでリアルなものにするのか、どこで番組として線引きするかなどのリスク管理については、複数の専門家に意見をきいて制作した。西条市を舞台にしたのは、津波被害に加えて地盤沈下なども起こり、愛媛県で一番被害が大きいと想定されているからだ。また､瀬戸内海は地震が発生してから津波の到達まで時間がかかり、避難所生活が落ち着いた頃に津波がくるということを訴えたかった。愛媛県では教育機関等で積極的に防災士の資格取得を推奨しているため防災士が多いといわれている。今回、防災士の知識を避難所生活に生かして番組制作ができたのはよかった。避難所の持ち物チェックは実際には行われていないと思うが、番組の仕掛けとして参加者の日頃の備えをチェックしていただいた。なるべく幅広い世代の人に参加してもらうため土日に避難所生活を設定したが、若い世代の参加が難しかった。今後は若い世代を防災の取り組みに巻き込んでいくことが課題だと感じた。

＜とさ金「南海トラフ地震　そのとき医療は」（総合　３月１０日(金)）について＞

○　高知市中心部では最大３メートルの津波が想定され、その後も長期間水が引かず、約半数以上の病院が孤立する可能性があることを初めて知った。近森病院医師の井原則之さんの「想像力を働かせて想定外を潰していくこと」ということばが印象的で、災害対策を進めていくのに大切であると思った。ただ、番組ではまず「高知県災害時医療救護計画」を説明するべきだったと思う。その後、具体例として２つの病院の取り組みを紹介することでより災害時の医療体制について理解が深まったと思う。また、「カギは“総力戦”」の事例として災害医療に関わる医療関係者を増やすことを紹介していたが、医療関係者だけでなく県民一人一人が命を守る取り組みや対策をすることも、災害時の医療体制の崩壊を最小限に抑えることにつながると思った。県民も総力戦の一員であると紹介があれば、災害時の医療体制の継続は医療機関だけの問題ではなく、より自分事として捉えることができたと思う。

○　今回の番組をきっかけに、情報が不足している可能性のある県内の小さい病院でも災害時の医療体制を知る機会になったらよいと思った。近森病院では、東日本大震災以降、災害に備えた訓練を継続していることに頭が下がる思いがした。スタジオでは実際に東日本大震災を経験した東北大学病院医師の石井正さんの説明がわかりやすかった。特に病院の備蓄は３日分が限度であり、外からの支援を受けるためのアクセスなど実態に即した計画が必要であるという指摘が印象的で、医療関係者にも参考になる内容だったと思う。また、「東日本大震災のときに、まさかというよりは、今日がこの日だったかと少し冷静になれた」という話からも、日頃の防災訓練が無駄ではないと改めて感じた。高知局の千野秀和アナウンサーと石井さん、伊藤詩織記者のやりとりが自然でよかったが、一部ＢＧＭが大きく、出演者の声が聞こえづらかった。

（ＮＨＫ側）

今回番組に出演した伊藤記者が、３月４日(土)のＮＨＫスペシャル　南海トラフ巨大地震「第１部　ドラマ」（総合 後 7:30～8:48、後 10:00～10:54）と３月５日(日)の「第２部　“最悪のシナリオ”にどう備えるか」（総合 後 9:00～9:54）の取材に関わっていたこともあり、内容をさらに発展させて高知県の医療をテーマにした番組とした。東日本大震災の際に医療活動を行っていた石井さんをゲストに迎え、お話しいただいたことで、実際に被災したときの状況をよりリアルにイメージできる奥行きのある番組になっていたと思う。

指摘いただいた「総力戦」については、医療関係者以外に県民も含まれていることを石井さんからもお話していただいていたが放送尺が限られる中、編集の過程でやむなく割愛することになってしまった。また、編集の過程や番組完成後にテレビのモニターなどで番組の音量を確認していたが、ＢＧＭが大きく出演者の声が聞きづらかったという意見は、今後の番組制作に生かしていきたい。

＜あわとく「パパ　ママ　子どもが徳島を守る」（総合　３月１０日(金)）について＞

○　日常生活に追われると災害への危機意識が薄くなり、また年月とともに震災の記憶や防災知識が風化するため、このような防災番組を通年放送していくことが大切だと思った。ママ防災士の取り組みをテンポよくわかりやすく紹介していたが、特に防災ダンスは、「姿勢を低く、頭を守る、動かない」というフレーズが繰り返しインプットされるため、よい取り組みだと思った。また、周りの人を巻き込んだ取り組みが多く、巻き込まれた人も防災意識が高まっていくのがすばらしいと思った。徳島局の安藤佳祐アナウンサーの「大げさなことをやる必要はなく、ハザードマップの検索をするとか、自分の不安な気持ちを周りに打ち明けて周りを巻き込んでいくなどの積み重ねがいざというときに大切な命を守ることにつながる」ということばで防災へ向き合いやすくなり、穏やかな気持ちで見終わることができた。また、「四国らしんばん」へのつながりがスムーズで、四国の一体感を感じた。

○　ラジオブースからの放送は、ラジオ番組のようにリラックスして見ることができ、ママ防災士の瀬戸さんの魅力が十分伝わっていたと思う。津波防災では、親子で避難場所や避難経路を話し合い、発災時にお互い探すことなく安全に避難をすることが大切だと思った。旧河道についてはより詳しい説明や徳島県で該当する場所を紹介してほしかった。昭和南海地震の体験者の話は子どもにとってよい学習になっていると感じた。一方で、子どもは大人によって災害から守られるべき存在であるため、子どもを「防災の主役」と表現する点は疑問を持った。子どもたちは、率先して高齢者や地域を守る立場にはなく、災害時に自分で考え、安全に避難できる知識と能力をまず身につけるべきだ。避難グッズについてマザーズバッグをベースに説明していたが、発災後１週間以上は支援がないことを覚悟して、避難バッグを準備しておく必要性についてコメントがあるとよかった。

（ＮＨＫ側）

番組の狙いとしてゆったり聞いて気軽に見てもらうことを意識し、視聴者に語りかけるようにラジオブースから放送することになった。

また、生放送であることを活用して視聴者からのメッセージを募集して番組の中で紹介するという構成にした。紹介できなかったメッセージは今後ＷＥＢ記事に展開することを検討している。また、ママ防災士の会代表の瀬戸恵深さんと一児のパパである安藤アナウンサーを起用し、子育て世代に番組を届けることを意識した。都市部である徳島市では地域の付き合いが希薄になっているため、ＰＴＡや学校のつながりでママ防災士の存在が大切になっていると思い、メインに取り上げた。宍喰町では津波が６分で到達するため高齢者の中には避難を諦める方がいると耳にした。そこで子どもたちの取り組みによって高齢者も一緒に防災意識を高めるという意味で子どもの存在がキーポイントになると思い、紹介した。時間の都合上、被害想定などの詳しい情報を伝えられなかったため、今後はその点を踏まえて番組制作にあたっていきたい。

＜ゆう６かがわ「とち知り」スペシャル「香川でも備えを！南海トラフ巨大地震」（総合　３月１０日(金)）について＞

○　香川県は震災の被害が少ないイメージを持っている人が多いため、昭和南海地震の際は県内でも犠牲者が出て、全壊する建物があったという情報を伝えることは重要だと思った。また、瀬戸内海の津波シミュレーション映像は、津波が長時間にわたり続く様子がリアルに映し出されていて、新しい発見だったと同時に危機感を感じた。ことばだけでなく、スタジオでのボードを使用した説明や、実験の映像は臨場感やインパクトがあり、震災の危険性をより強く印象づけることができたと思う。長尾断層の紹介ではその成り立ちを説明していたが、知らない県民も多いと考えられる中、県内にも断層があることを意識するきっかけになったと思う。一方で長尾断層について「今後３０年間に地震発生の確率ほぼ０％」という表現が気になった。地震の対策を紹介する番組でこの表現は適切でないと思った。また、震災が起きたときの他県との連携事例を紹介するとよかったと思う。

○　南海トラフ巨大地震の基礎情報として、シミュレーションに基づいて津波や震度の具体的な数字を明示していたのは非常によかった。津波については、発災後しばらくたってから到達するため、避難には時間があり身支度を整えて逃げることができる点や津波は何度も繰り返し起こるため半日は避難先から戻ってはいけないという香川

大学の金田義行特任教授の明確なメッセージが印象深かった。香川県では長尾断層しか見つかっていないが、発見できていないだけで断層はいたるところに存在する可能性もあると考えられる。断層型の地震もくるというリスクを常に頭に置いておく必要があると感じたため、地震発生の確率が「ほぼ０％」という表現には疑問を感じた。どこで起きてもおかしくないということを明確に示すべきだと感じた。３月だから防災番組を放送するということではなく、常に視聴者の防災意識を高く保つような情報発信や番組制作をこれからも心がけてほしい。

（ＮＨＫ側）

防災の意識が低いと言われている香川県民に瀬戸内海にも津波は発生するため災害に対する備えが必要であることを知ってもらうというのが番組の狙いだった。瀬戸内海の津波の特徴である発災から到達まで時間があることや、津波の到達回数が増えるほどその規模が大きくなるという地域特性を踏まえた解説を心がけた。このような香川県に特化した情報発信や番組制作ができるのは地域放送局の強みだと思う。また、実際の土地に出向いたり、実験に参加してみたりと防災意識の低い方にもできるだけわかりやすく、気軽に見ていただけるような構成を考えた。さらに番組のデジタル展開にも力を入れ、番組からＱＲコードで特設ＷＥＢサイトに誘導したり、ＳＮＳでの情報発信に注力したりした。指摘いただいた長尾断層については、国の想定で地震発生の確率が０％といわれている以上、その情報をださなければ恐怖感をあおるだけであり、真摯な伝え方ではないと考えた。ただ、０％であることはしっかり伝えたうえで、長尾断層以外にも同じような構造を持った断層があることを、もっと強調してもよかったとも感じる。

＜放送番組一般について＞

○　３月１０日(金)の四国らしんばんでは小学生が高齢者を避難させる訓練について紹介されていたが、津波が来たときは、各自が逃げるという意識づけをはっきりさせるべきであり、子どもたちが高齢者の避難を誘導させるべきではないと思った。実際に津波が発生した場合、この訓練を意識づけられた子どもが高齢者を気にして逃げ遅れてしまう可能性や、高齢者を助けられなかった場合に子どもが受ける精神的影響も懸念した。

（ＮＨＫ側）

「四国らしんばん」では黒潮町の取り組みを紹介した。町は犠牲者ゼロを宣言しており、自分の命を守るため真っ先に避難をすることはもちろんのこと、高齢者の避難をどのように手助けするのかを課題としている。さまざまな取り組みの１つとして、子どもの手助けが高齢者の避難に対する意識改革につながるという考え方に基づいた訓練について、もう少し補足が必要だったと反省している。

○　黒潮町には３４メートルの津波が想定されているとたびたびメディアで報道されているが、この数字だけひとり歩きして、地域では観光分野を中心に影響を受けて振り回されていると感じる。「四国らしんばん」で、３４メートルの津波の高さを松山局の永井伸一アナウンサーとの比較で表した場面があったが、このように表現する意味があるのか疑問に感じた。数字を明確に示すことは注意喚起するために効果的な一方で、メディアを通じて数字だけがひとり歩きしてしまう可能性もあることを理解し、扱い方に想像力を働かせてほしい。

（ＮＨＫ側）

指摘の通り、リアルな津波の怖さを伝える目的で、番組内では３４メートルの高さを表現したが、それは最悪の事態を想定している場合のことで、黒潮町の一部地域であることをしっかり説明をするべきであった。数字の扱い方は今後もきちんと検討していきたい。

○　最近、卵の価格と肥料代の高騰などを受けて養鶏業を取材したニュースをよく見るが、この時期は、鳥インフルエンザが流行しやすく、養鶏場に取材をするのは取材者が鳥インフルエンザを持ち込む可能性があるため、リスクが非常に大きい。鳥インフルエンザの危険性のない夏に取材して、極力その資料映像を使用するなど、この時期にむやみに鶏舎に入る取材は控えたほうがよいのではないかと思った。

○　番組で最初に内容やテーマを明示し、その後は何の内容をやっているのか情報がなく終わってしまうことが何度か見受けられ、途中で興味を持って見始めても内容がわかりにくいことがあった。今後は何の内容を伝えているのか最後にもう一度紹介するか、画面上に常にテロップを表示するなど検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

ニュースなどでは、番組の途中から見てもできるだけわかりやすいように、画面上にマスコットタイトルを入れて番組内容を表示し

ている。番組構成によっては表示ができない場合もあるが、引き続き、指摘の点を踏まえて、対応を検討していきたい。

○　２月２５日(土)、３月４日(土)のギュッと！四国を２週連続で視聴した。以前はさまざまなコーナーがあり、よくわからなかったが、今回は大きく２つに整理され、ニュースと天気予報でまとめていたため、内容も非常に充実していてよかった。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２３年２月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、２０日（月）、東京第一ホテル松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、「２０２３年度四国地方向け地域放送番組編集計画（案）」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、事前に視聴してもらった。会議では、事前に視聴してもらった四国らしんばんＳＰＥＣＩＡＬ「“色”がつなぐ　あの日と今　-カラーでよみがえる四国-」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、３月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	半井　真司	（四国旅客鉄道 取締役会長）
委　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について＞

○　パリオリンピック・パラリンピックに向けて、注目選手の活躍や若年層に人気の高い競技などを積極的に発信していくと示しているが、特にパラリンピックにおいては、同じ競技でも障害が重い選手は取り上げられることが少ないように感じている。競技内容のみならず、選手にどのような障害があり、どのような状況なのかを伝えることで、視聴者の理解も深まると思う。

○　受信料の値下げが行われたり、会長の交代があったりと状況が変わる中で、地域局が制作する番組やその全国発信がどのようになるのか気になっていたが、従来の発信に加え、ＮＨＫプラスでの配信も広がると伺いありがたく思う。今後も、基本計画の４つの重点事項の１つに掲げられている「地元密着と地域連携を強化」に視聴者目線で取り組んでほしい。

＜「２０２３年度四国地方向け地域放送番組編集計画（案）」について－諮問－＞

○　高知局の重点事項にある「県内各地の郵便局員の協力により災害時の状況の映像を送ってもらう取り組み」とはどのようなものか。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫと日本郵便との間で協定を結んでおり、災害時には業務に支障のない範囲で被災地域の情報を提供してもらっている。１月下旬の大寒波の際には、県内の郵便局員から雪が降っている様子や、道路の状況などを動画で提供してもらい、実際に放送でも活用した。

○　松山局の重点事項の中にある「視聴者起点を第一に、放送・デジタル・イベントを融合した視聴者コミュニケーションを展開します」という点について、とても楽しそうで興味を持ったが、具体的にどのようなことを考えているのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

現時点で具体的にお話しすることはできないが、放送で完結させずにデジタルやイベントなどにも展開し、少しでも多くの方に接触してもらう取り組みを積極的に進めていきたいと考えている。新年度以降、新しい動きが決まり次第お伝えしたい。

○　災害報道に関して、以前ニュースの放送中に地震が起きた際、視聴者への呼びかけが反響を呼んだアナウンサーが防災士の資格を持っていると聞いたことがある。四国の中でも、防災士の資格を持っているアナウンサーやキャスターがいるのか。また、資格取得に向けた取り組みなどがあるのか。

（ＮＨＫ側）

松山局に防災士の資格を持つアナウンサーがいる。地元への思いが強く、西日本豪雨など過去に大きな災害のあった地域を放送など

を通じて自分のことばで守りたいと資格を取得している。

○　伊方原子力発電所に関して、防災の観点からも重要な問題だと考えている。さまざまな角度から取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

非常に重要な課題だと捉えている一方で、多様な意見があるとも認識している。このように意見が分かれる問題については、きちんと取り上げ、多くの視聴者がこの問題を考えるきっかけになるような情報を引き続き提示していきたい。

○　四国地方の基本方針および各局の重点事項については、今年度の取り組みをさらにブラッシュアップするとともに、来年度の新たなできごとをしっかりとフォローしていこうという姿勢だと受け止めた。基本方針に掲げられている「“ウィズコロナ”時代の暮らしに必要な情報や経済活性化の取り組みをさまざまな角度からわかりやすく伝えます」という点については、新たな時代がどのように変わっていくのか、今後に向けた取り組みをしっかりと放送してほしい。

また、防災に関連して、これまで日本国内では災害発生後の生存率が急速に低くなる目安として「７２時間の壁」ということばが度々使われてきた。ただ、今回のトルコ・シリアで発生した大地震では、100 時間を超えて救助された方もいたと報道されている。状況にもよるが、やはり生き残るという強い意志があったからだと思う。現在の日本のように「７２時間の壁」ということばが頻繁に使われると、被災した際に心が折れてしまう人もいるのではないかと危惧している。今後の報道におけることばの使い方が気になった。

（ＮＨＫ側）

災害報道におけることばの選び方については、都度振り返りを行っている。いただいた意見については、今後の検討の中で生かしていきたい。

○　諮問された「２０２３年度四国地方向け地域放送番組編集計画（案）」については、委員から出された意見の趣旨が具体的な番組編成のうえで生かされることを前提に、番組審議会として原案を可とする答申をしたい。

○　異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、３月の審議会で説明したい。

＜四国らしんばんＳＰＥＣＩＡＬ「“色”がつなぐ　あの日と今　-カラーでよみがえる四国-」総合　２月１０日(金)放送）について＞

○　大変興味深く視聴した。特に、カラー化された昭和南海地震当時の映像は、非常に新鮮に感じた。徳島大学の学生が祖父母の結婚式の映像のカラー化作業を通して、家族との間にコミュニケーションが生まれていた場面もとてもよかった。ただ、そのほかのカラー化された映像を通しても、世代を越えて会話が弾んでいたが、カラー化されたことが原因なのかはよく分からなかった。まず白黒の映像を見せてから、カラー化されたものを見せ、反応を撮ったほうがよかったのではないか。また、カラー化技術についてもっと丁寧に説明してほしかった。そもそも当時の色の情報が乏しい中で、映像の色が本当の色と言えるのか疑問に思った。加えて、カラー化によって失われたことはないのか気になった。災害の深刻さなどについては、白黒映像からイメージを膨らませ自分事にしていく効果もあると思う。今後、白黒映像のカラー化は急速に普及していくと考えられるが、ＡＩに任せきりではなく、時代考証には慎重に取り組んでいく必要があると感じた。

○　番組冒頭、白黒映像を見たゲストに「何を作っている映像か」とクイズを出す場面から始まったが、多くの視聴者にとってはすぐに分かる内容で、カラー化ならではというものではなく、番組への興味が薄れてしまった。番組中に紹介された四国の各県庁所在地の白黒映像のほうがオープニングとして魅力的だったのではないか。愛媛県のみかん農家の映像では、カラー化を通して当時の色彩が楽しめたほか、次の世代へと受け継がれていく様子も伝わりとてもよかった。また、昭和南海地震の事例では、過去と現在の映像を見比べることで、当時何が起きたかがより詳細になり、今後の防災に役立つ点をうまくとらえていた。中でも、東京大学大学院の渡邉英徳教授の「災害は起きる度に上書きされていってしまう」ということばは強く印象に残った。また、家族間のかかわりが少なくなってきている現代で、家族写真のカラー化を通し、コミュニケーションが生まれている点も感心した。ただ、番組全体を通して、カラー化してもあまり変化を感じないものも多く、インパクトに欠ける印象を持った。もう少し視聴者をひきつける工夫がほしかった。

○　クイズから番組が始まったことで、カラー化による見え方の違いや重要性が分かり

やすく、よい導入だと思った。番組の中ではたくさんのカラー化した映像が紹介されていたが、ジャンルやカラー化の意義も、さまざまな角度から取り上げられており、満足感があった。ゲストの川村文乃さんが白黒になじみの薄い若い世代の方だったこともあり、その反応に共感して見ることができた。災害や戦争を記録した映像や写真のカラー化からは、期待していた以上の学びがあった。特に松山空襲の写真は、何度か見たことがあったが、初めて見たかのようなインパクトがあった。画面上に表示されていたＱＲコードから、カラー化した映像をまとめたページにアクセスしたが、「ひめポン！」の中で紹介している同様のコーナーへのリンクもあり、番組視聴後も楽しめた。一方で、愛媛県の内容が多く、ほか３県とのバランスが気になった。また、ＡＩのカラー化技術の詳細も知りたかった。画面上のＱＲコードから仕組みを説明したページに誘導するなどの工夫があればなおよかった。

○　とても楽しく視聴した。自分と直接関係がないような映像でも、白黒からカラーになった瞬間に引き込まれ、わくわくした。カラー化したことで、白黒では分からなかったことを発見したり、その当時の人々が何を大事に受け継いできたかを感じ取れたり、色が持つ力を改めて教えてくれた番組だった。どの映像を見ても、白黒よりもいっそう人の気持ちを揺さぶるものになると感じた。昭和南海地震や松山空襲の事例は、カラー化したことによって細部がよく見え、実感がわくとともに悲惨さも増し、カラー化の意義を強く感じた。全体的にとても楽しい雰囲気でありつつも、これからの未来について考えさせられる内容だった。ただ、カラー化については、ＡＩ技術だけではなく、当時の状況を聞き取りながら色を付けることもあるという紹介もあり、記憶違いなどで実際とは異なる色になっている場合もあるのではないか疑問に思った。

○　白黒映像だとどこか別世界の話だと認識してしまうが、カラー化することで今とつながっていることを改めて実感した。四国４県の映像を白黒とカラー化の両方で見ることで、四国の今と過去を旅しているような気持ちになった。カラー化した映像を紹介するだけでなく、それぞれの事例の関係者を深く掘り下げて取材していたため、すべて遠い過去の話ではないことを感じながら見ることができた。昭和南海地震の際に津波がどこまで浸水したかをカラー化した映像で見てみると、浸水区域が明確に認識できてよりリアリティーをもって映像をとらえることができた。また、家族の白黒写真をカラー化する徳島大学の授業はとても興味深かった。一方で、ＡＩのカラー化技術について詳しい説明がなかったため、カラー化がどんな仕組みで行われているのかという点や、実際の色にどれだけ合致しているかをどのように判断するのかという点が非常に気になった。

（ＮＨＫ側）

テレビ本放送開始から７０年という節目に白黒映像のカラー化に取り組んだ。ＮＨＫ松山放送局では「ひめポン！」の「あの日めぐり」というコーナーでさまざまな白黒映像をカラー化して紹介していたが、視聴者から好評を得て「四国らしんばん」への展開につながった。カラー化することで何が言えるのか、その先に何があるのかということを常に問題意識としてもち、番組制作にあたった。また、白黒映像ではわからなかった発見をする、あすを生きるヒントや力にしていくという２点を目指してカラー化に取り組んだ。カラー化から読み取れる当時の状況や昔の人の奮闘を今に伝えていくことで、あすにつながっていくのではないかと感じた。また、多くの方からご指摘があったように、ＡＩによるカラー化技術について番組内でもう少し詳しい説明を行うべきだった。さらに画面上にＱＲコードを表示し、カラー化技術の詳しい説明をＷＥＢ記事で展開するなどの工夫が必要だったと感じている。

○　白黒映像をＡＩでカラー化し、当時の様子を読み取っていくという大変興味深いテーマだった。まず、愛媛県の特産品であるみかんの事例から始まり、昭和南海地震や旧満州への開拓団の事例でシリアスなテーマに落としたあとに、最後は徳島大学の学生の家族という身近なテーマに戻したという流れは、大変見やすい構成で充実した内容になっていた。カラー化することで当時の様子を非常に身近に感じることができたし、徳島大学の山本一絵さんがカラー化した祖父母の結婚式の映像を祖父の髙田豊輝さんと語り合う場面では、世代を超えて会話が生まれる様子が見受けられた。香川県は旧満州への開拓団についてテーマになっていたが、ほかの３県に比べて内容が薄いように感じ、全体的に４県で偏りがでてしまっている点が残念だった。また、松山局の鈴村奈美リポーターが山本さんにカラー化する機械を紹介する場面では、もう少し機械や技術について具体的な説明があるとよかったと思う。

○　白黒映像をカラー化することの魅力やその活用方法がさまざまな視点から紹介されていた。また、白黒とカラーの映像を同画面で表示した点は対比がわかりやすく工夫されていると感じた一方で、カラー化の技術的な部分についてはより詳しい説明があるとよかった。昭和南海地震の事例では、写真や映像から分かることだけではなく、被災者や経験者の方のインタビューが重要であると感じた。また、徳島大学の山本さんと祖父が、カラー化した写真を見て会話をしている場面は印象的で、世代を越えてコミュニケーションが生まれるきっかけにカラー化が役立っていることを感じた。白黒映像には今と昔という壁を感じるが、カラー化によってその壁がなくなりコミュニケーションがより潤滑になると実感した。また、テレビの本放送が始まって７０年と

いうことで、今後テレビの映像が私たちの生活の中でどのような役割を果たしていくのかを考えるきっかけになった番組だった。

○　番組冒頭で、香川県の塩田と愛媛県のどろんこ祭りをクイズで紹介していたが、どちらも白黒ではわかりにくい例なので、カラー化する意義づけとしてよい取り上げ方だった。災害や戦争の映像は、カラー化することで教訓や気づきにつながること、特に戦争は体験者が減っており記憶の継承が課題になっているため、当時の映像をカラー化することは社会的意義が大きいと感じた。また、旧満州への開拓団の事例では当時開拓団にいた方の取材をしていたが、こうした証言とともに当時の貴重な映像を残すことは大切なことだと感じた。カラー化するには世代を越えて話を聞く必要があり、その過程を通して時代をつないでいけると思う。カラー化の取り組みがますます広がってほしいと思った。最近ではスマートフォンのアプリでカラー化もできるため番組の中でそうした紹介があるとより楽しんで視聴することができたと思う。

○　番組の冒頭では、白黒映像でも十分身近に感じることができるうえ、白黒だからこそ色を想像するだいご味があると感じていた。またスマートフォンのアプリで簡単にカラー化できる時代に、カラー化を番組のテーマとして取り上げる必要があるのかも疑問を感じた。しかし、昭和南海地震の事例で、あすの防災に生かすために危険を可視化するには非常に大切なことだと感じ、過去の災害の映像や写真をカラー化することで防災における重要な教訓になると思った。松山空襲の写真はカラー化することによってより身近に感じた一方で、戦時中の写真はよみがえらせたくない過去でもあるため白黒のままでよいと感じた。徳島大学の山本さんが祖父母の結婚式の映像をカラー化して祖父母の人生を知るという流れは、カラー化によって記憶がよみがえること、色が過去と今をつなげることを実感し、番組のテーマに合った内容だった。

○　番組の冒頭と終盤に四国各地の映像を使い、番組中盤に「みかん王国の誕生」「昭和南海地震の教訓」「旧満州への開拓団」「映像に秘められた家族の物語」の四国４県の事例を組み込んだ構成は時間配分もよく適切であった。松山局の永井伸一アナウンサーと渡邉教授の的確な解説とゲストの川村さんの若者等身大のリアクションというバランスがよく、映像をカラー化するおもしろさが十分伝わってきた。また、事例ごとに関係者の取材を入れたことで、カラー化の意義や効果も明確に示されていた。カラー化について渡邉教授の「過去と今が地続きになる」ということばや徳島大学の佐原理准教授の「記憶のトリガーとなる」ということばを軸に番組が展開されていて、納得ができる構成だった。また、渡邉教授の「刹那的な時代だからこそ、過去を未来に

生かしていく」ということばは、番組の締めにふさわしく説得力があった。今回のように適宜番組の尺を拡大してテーマをより深く掘り下げた番組を今後も期待したい。

○　カラー化する映像として取り上げた４県すべての事例に対して実際に現地へ足を運び、深く掘り下げた取材をしていたことで、カラー化した映像に対する関係者の想いが十分伝わる内容になっていた。みかん農園を紹介した事例では、愛媛県のみかんが日本を代表するブランドや生産量となった原点ともいえる映像を基に、索道の整備やみかんの生産の効率化や発展に尽力した方の話をきくことができて非常に興味深かった。昭和南海地震の地震や旧満州への開拓団の映像からは四国の歴史をより深く知るきっかけになり、後世にも語り継いでいくという点においても有意義な番組であったと思う。ゲスト出演していた高知出身の川村さんは、女性で初めて「１級マグロ解体師」の資格を取得した経歴を持つ方である。番組で漁業関係の映像を取り入れれば自然な流れで川村さんの特技について触れることができたと思う。このように番組を通して、四国出身の若手芸能人の知名度向上につながるような工夫を取り入れてほしい。

（ＮＨＫ側）

四国４県からカラー化する事例を選んだというよりは、産業、災害、戦争、家族というテーマを重視して番組を構成した。たしかに、ほかの３県に比べて香川県の旧満州への開拓団の事例が短くなってしまった点は反省している。今回の番組を通して、ＮＨＫにはアーカイブ映像としてたくさんの貴重な映像資産があり、そのレガシーをしっかり後世に伝えていかなければならないことを実感した。また、テレビを見ることで、家族間にコミュニケーションが生まれ、家族のつながりが深まるということもテレビの役割のひとつだと改めて感じた。白黒映像のカラー化も含め、テレビにはまだまだたくさんの可能性があると感じているため、いただいた意見を生かして今後の番組制作に取り組んでいきたい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２３年１月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１６日（月）、東京第一ホテル松山において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらったドキュメンタリー２０２２「5人やき強うなれる～高知・美容学生物語～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、２月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	半井　真司	（四国旅客鉄道 取締役会長）
副委員長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
委　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜ドキュメンタリー２０２２「５人やき強うなれる～高知・美容学生物語～」
（総合　１２月２９日（木））について＞

○　「よさこい祭り」の映像から軽快に始まるオープニングでは、踊り子たちの個性的なヘアスタイルを輝かせているのは美容師であるという紹介があり、爽やかな気持ちになった。「理美容甲子園」に向けて高知理容美容専門学校でトップクラスの実力を持つ学生５人が互いに技術を磨きながら、教え合い、競い合うことへの葛藤を抱えつつも、それを克服していく姿が感動的だった。登場人物が少ないためそれぞれの個性が

輝いており、派手さのないシンプルな番組進行が好印象だった。また、展開に合わせて坂本龍馬の映像が効果的に使われていたのはよかった。「大会を通して人に感謝することを覚えたり、素直さが一番人間としても成長すると思いますし、それが卒業してから長くお客さんとお店にかわいがってもらえる人材になる」という高野敏彰先生のことばがとても印象的だった。正月や成人式前に興味深いテーマであり、学生たちが目標に向かって頑張る姿が視聴者に十分伝わる内容だった。

○　オープニングで「競い教え合う中で５人が見つけたものとは」というナレーションがあり、番組後半に「自分も一緒にやってこれて、お互い励まし合って高め合ってこれた」という甲元愛珠（アンジュ）さんのことばがあったことで、学生たちが全国大会を目指して自分と向き合い、仲間とともに成長できたことを実感できる構成になっていた。野並令弥（レイヤ）さんが地元の四万十市の美容室を訪れる場面があったが、高野先生の「大会を通して人に感謝することを覚えたり、素直さが一番人間としても成長すると思いますし、それが卒業してから長くお客さんとお店にかわいがってもらえる人材になる」ということばと関連したエピソードになっていたので、高野先生の指導方針に対して説得力の増す場面になっていたと思う。地域の人に密着したドキュメンタリー番組は、制作するのに経費や労力がかかると思うが、ＮＨＫだからこそできる番組だと思うので、今後も継続して放送してほしい。

○　「理美容甲子園」の課題内容や評価基準が説明されたあと、学生たちのカットの仕上がりを比較する映像があったことで、理美容の専門知識がなくても競技の難しさを理解することができた。また、マネキン１体の価格や練習で１人２０体使用するという説明も競技の大変さをより一層イメージできた。タイトルやテロップに方言が特徴的に使われていた点、「よさこい祭り」や坂本龍馬の紹介が入っていた点は地域色を効果的に感じさせる工夫だった。また、学生たちの髪型が頻繁に変化していたため、名前をニックネームのように表記し、テロップを色分けしていた工夫は登場人物を見分けやすくなっていた。学生たちを丁寧に取材したことで、学生の素直な意見や高野先生の指導方針への感じ方の変化をうまく引き出せていたと感じる一方、レイヤさんとアンジュさんの取材が中心だったため、ほかの３人についても個性が分かる紹介や全国大会に選出された森田愛叶（マナカ）さんのコメントがあるとよかった。

○　５人の学生らしい思考や行動がわかりやすく表現されていた番組構成だった。また、佐々木蔵之介さんの柔らかく優しい語り口のナレーションが時間を感じさせず、番組をうまく引き立たせていた。全国大会を終えたレイヤさんとマナカさんに向けて「自分も一緒にやってこれて、お互い励ましあって高め合ってこれた、本当にお疲れさまって一言言ってあげたいです」と言ったアンジュさんのことばから、大会を通して５

人それぞれ成長している姿がうまく表現されていた。テロップも方言のまま表示されていたため、聴覚障害者には読みにくさがあると感じた。また学生の胸元が見えそうなシーンがあったので配慮が必要だと思った。全国大会に向けて練習に励んでいるレイヤさんのコメントのあと、学生どうしでバトンを渡す映像があったが、バランスが悪い印象を受けた。アンジュさんとレイヤさんが番組の中心だったため、もう少し５人のシーンやコメントがあるとよかった。

○　ドキュメンタリー番組らしく淡々と進行する中、学生たちの葛藤や悩み、友情を描いた美しい構成になっていた。佐々木さんの心地よく落ち着いたナレーションがよかった。高野先生の指導方針に反発するアンジュさんとレイヤさんは、初めは自分が一番になるために練習していたが、仲間とのふれあいを通して距離を縮めていく過程がうまく描かれていた。５人全員で全国大会に行くことはできなかったが、大会を通して５人で１つになれたことを実感できたので、「５人やき強うなれる」のタイトルと合致している構成だった。アンジュさんとレイヤさんについて、主義主張が相反していたら対比関係にするねらいがあると理解できるが、２人とも先生の指導方針に反発するも最終的に仲間を認めたという同様の成長過程だったため、２人を番組の中心に選んだ目的がわからなかった。また、５人についての番組なのに、結果的に２人の番組になっている点が気になった。

（ＮＨＫ側）

２７分の番組に仕上げるため、学生５人の取り上げ方は議論を重ねた。それぞれを紹介したい思いはあったが、５人の自然なやり取りや学生らしい生き生きとした場面が魅力的だと考え、このような構成になった。また、アンジュさんとレイヤさんを中心に描いたのは、高野先生の指導方針に疑問を持つ２人が仲間たちと教え合い、競い合ったひと夏の経験を経てどう変化したかをうまく描くことができたからだ。学生たちのニックネームを使用しテロップを色分けする工夫で、視聴者に５人を区別して認識してもらうことができたことはよかった。また、全国放送であること意識して高知県らしさを出すため、「よさこい祭り」や坂本龍馬の映像を使用することになった。ナレーションには佐々木さんをキャスティングしたが、柔らかく優しい語り口で、学生たちを見守っているということを印象づけることができてよかった。学生どうしがバトンを渡す映像については、練習の合間に自然と撮れた映像で「全国大会へバトンを渡す」という意味でイメージにあう映像だと考え使用したが、逆にすこしわざとらしい印象になってしまったかもしれないと感じている。

○　高知県を代表する「よさこい祭り」の映像を流し、祭りを支える１つに美容師の存在があると紹介する流れは、効果的に美容師に焦点を当てて興味を引くオープニングだった。「理美容甲子園」という名称から学校対抗だと思ったため、もう少し早い段階で大会が個人戦であることや全国大会への道が狭き門であることの説明がほしかった。学生たちが勝手に授業を終わらせてしまい、翌日の授業に高野先生が来なかった場面は、学生たちを奮起させるために指導者があえて突き放すよくある手法だと思ったが、高野先生のことばや指導方針を通して先生が信念をもって学生の指導に当たっていることが理解できて好感が持てた。学生が目標に向けて情熱をかけて挑戦する姿にとても希望を感じる内容だった。

○　はじめに放送予定を確認したときとタイトルが変わっていたが、伝えたい番組の軸が変わったのかと疑問に思った。髪をカットするシーンなど動きの多いものではないので、全体的に派手さはなくシンプルで見やすい構成になっていた。「理美容甲子園」の評価基準が分かりやすく説明されていたため、美容業界のことを知らない視聴者でも理解しやすかったと思う。「よさこい祭り」の映像は、学生たちが祭りに関わっているわけではなかったため、唐突な印象を受けた。また、ナレーションで学生の成長過程を表現することが多かったので、もう少し彼女たちの表情の変化で成長を感じさせる演出があるとよかった。さらに、学生にとって両親や先輩の美容師がどのような存在だったか、何がきっかけで美容師を目指したのかなどのエピソードがなかったため、もの足りなさを感じた。

○　「理美容甲子園」に向けて、５人の学生どうしが技術を磨き高め合っていく様子がよくまとめられていた。高野先生の指導方針である「褒め合い、くさし合いをしいや」や「自分の得たモノを出さないと人も出してくれない、ずっと出さんままいくと個々の戦いになって伸びが悪くなって全滅する」ということばは、大会で優勝者を出している指導者だからこそ、非常に説得力あった。この指導方針は先生と学生、学生どうしの信頼感がないと成り立つことはできないと思うが、学生たちが勝手に授業を終わらせてしまい、翌日の授業に高野先生が来なかった場面で、学生たちが先生に電話をするシーンはまさに信頼関係が醸成されていく瞬間であったと感じた。四国大会の後に「賞をとったのはうれしかったけど、なんか悔しい気持ちがいっぱいです」と言ったレイヤさんのことばは、困難があっても人を信じて乗り越えていく力が彼女に身に付いたと実感した場面だった。

○　高野先生の「褒め合い、くさし合いをしいや」という指導方針に反発するアンジ

ュさんとレイヤさんの葛藤や心の変化を深く掘り下げて描けていたのは、長い間、彼女たちの撮影をしていたからこそだと感じた。自分の意見を内に秘める若者も多い中で、２人が仲間に対してライバル心をあらわにしていたのは非常に珍しいと感じた。レイヤさんが地元の四万十市で、憧れの美容師である野々下未来さんに髪をカットしてもらう場面では、もう少し２人の関係性や美容師を目指したきっかけを深く掘り下げてほしかった。授業に高野先生が来なかった場面で、学生たちが先生に電話したときに「君たちは卒業生も携わってくれて、学校も場所を貸してくれて、やりたくてもやれん子らとは違う」ということばで高野先生が学生たちを諭す場面は感動的で、学生たちにもそのことばが届いたことが見受けられた。学生たちがどんな美容師になっていくのか楽しみだと感じる内容だった。

○　５人の学生に焦点を当て、彼女たちが仲間とともに技術を高め合う中で感じた葛藤や悩みを乗り越えて成長する姿を、飾らずにありのまま描けていた。感受性豊かな年代である学生たちの心情に寄り添い、本音を引き出す取材ができていたからだと思う。また、学生が弱音を吐いて、本音を漏らす瞬間の表情をアップで捉えており、長期にわたって粘り強く撮影をしていたことがうかがえた。学生たちが勝手に授業を終わらせてしまい、翌日の授業に高野先生が来なかった場面で、学生たちが先生に電話をするシーンは、学生たちが人に感謝することや素直さの重要性に気づいて成長していく過程が視聴者に分かりやすく伝わる構成だった。「５人やき強うなれる」というタイトルから５人の個性が相乗効果を発揮して成長していくイメージをしていたが、実際にはアンジュさんとレイヤさんの２人が中心だったので、もう少しほかの３人についても取り上げてほしかった。

○　５人で技術を教え合うことで自分の強みと弱みを理解でき、１人だけでは不可能な成長を遂げることができることが伝わり、高野先生の指導方針のすばらしさが十分に理解できた。また、高野先生がどのような経緯でこの指導方針を取り入れたかについて興味を持った。アンジュさんとレイヤさんの２人に焦点を絞ったことで、５人それぞれを描くよりも散漫にならずに、テーマに沿った構成になっていたと感じた。一方で、５人それぞれのコメントがあれば「５人やき強うなれる」というタイトルをより一層印象づけることができたと思う。授業中の学生たちの甘えた態度やその後の反省風景といった５人の自然な姿がしっかり描けていたのは、長期間の取材を通して、学生と制作スタッフ間の信頼関係が構築されていたからだと思う。若者が将来の夢に向けて努力する姿は元気がもらえるので、今後もあまり知られていない分野で頑張っている若者たちの姿を取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

タイトルについては、方言を使って５人が感じたことを前面に出す表現に変更した。指摘のとおり、彼女たちが美容師を目指したルーツを紹介したほうが５人それぞれの見え方に厚みが出たと思うが、番組尺の関係上、断念せざるを得なかった。高野先生がこの指導方針を取り入れた経緯は、競技で勝つことが目的ではなく、その過程で､成長し社会性を学んでほしいという考えがあったからだと思う。また､県外の人と接する機会の少ない高知県の地理的な特性もあり、「理美容甲子園」のような県外に出て挑戦する機会を高野先生は大事に考えているようだった。学校を卒業しても、美容師として活躍できるように指導する高野先生の思いを学生たちが理解していく過程を描けたのはよかったと思う。

＜放送番組一般について＞

○　大阪湾の淀川河口付近にクジラが迷い込んだニュースを見たが、近くで撮影や取材をしていることの危険性やヘリコプターを使った取材がクジラに与える影響などを懸念した。また、鳥取県岩美町の海岸でダイオウイカが漂着したことを報じるニュースの中で子どもたちが素手でダイオウイカに触れている映像が使用されていたが、海岸に打ち上げられた生き物が病気を持っている可能性もあると思う。むやみに打ち上げられた生き物を素手で触っている映像を報道するのは控えたほうがよいと思う。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２２年１２月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１９日(月)、東京第一ホテル松山において、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった四国らしんばん「四国　観光新時代」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	半井　真司	（四国旅客鉄道 取締役会長）
副委員長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜四国らしんばん「四国　観光新時代」（総合　１２月２日(金)）について＞

○　「観光新時代」というテーマを印象づけるオープニングだった。紹介されていた「サステイナブル・ツーリズム」の事例はすべてすばらしいと思ったが、新しい観光の形を成功させるのは簡単ではないと思うので、「サステイナブル・ツーリズム」が成り立ったプロセスを紹介してほしかった。松山局の永井伸一アナウンサーの力強く明るい番組進行はよかった。自分たちにも「サステイナブル・ツーリズム」の取り組みが実践できるという前向きな気持ちにさせてくれた。まだ「サステイナブル・ツーリズム」

に取り組んだことがない地域の背中を後押しする目的もあることを感じた。観光戦略アドバイザーの村山慶輔さんがアンケートに寄せられた四国の観光の課題についてアドバイスする場面で、時間内に収めるために急いで答えていたからか回答の内容が浅く感じた点は残念である。

○　愛媛県大洲市の事例では、ホテル以外にも誘致した飲食店や雑貨店、夜間のライトアップなど、町ぐるみの取り組みが紹介されていてよかった。「観光地にするのが目的ではなくて、観光は手段だと思っています」というキタ・マネジメント代表の髙岡公三さんのことばが印象深く、歴史文化の保全と地域の活性化が目的となっている点がすばらしいと思った。徳島県上勝町の「ＩＮＯＷ」の事例では「ゆこう」を余すことなく使い切る取り組みがあったが、日常生活でも工夫してゴミを出さない体験ができるのか気になった。最後に四国の観光の課題として、「発信力が弱い」「戦略を立てる人材の不足」「四国４県の連携」「地域の関心の低さ」の４つが挙げられていたが、「地域の関心の低さ」は特に日々実感しているので、こうした課題にもスポットを当てて啓もうしていく番組をこれからも期待したい。

○　「サステイナブル・ツーリズム」に光明を感じた。大洲市の取り組みとして紹介されていた歴史的建造物をホテルにリノベーションする取り組みは目新しいものではないが、地域全体で協力しながら行っている点は持続可能性があると思う。ホテルの高額な宿泊費も紹介されていたが、文化を安易に消費させないという地域の強い意志を感じ、ことし９月に世界の持続可能な観光 100 選に選出されたことが納得できた。歴史文化の保全、地域経済の活性化、投資による利益の再投資の好循環を応援したいと思った。上勝町で町民が「ゼロ・ウェイスト」を目指して長い年月をかけて築いてきたシステムが世界的な観光資源になっていることはすばらしいと思った。歴史、文化、風土を大切に発信し続ける人がいるかぎり、世界中から地域を尊重し、地域に貢献したいという思いを持つ人が訪れて、地域の持続可能性は失われないと感じた。

○　「観光新時代」というテーマがオープニングの音楽に合っていたと思う。大洲市の事例では、地域全体で取り組んでいることや、経済的な活動につながっていることの理由についてもう少し掘り下げてほしかった。ホテルの高額な宿泊費について紹介されていたが、「サステイナブル・ツーリズム」の維持にはサービスに応じた適切な価格設定が必要だと思うので、そのような経済的な情報もあるとよかった。また、旅のだいご味の一つである食事についてもう少し詳しい紹介があるとよかったと思う。高知県四万十市の川漁師体験ツアーを紹介するＶＴＲだが資料映像のように見受けられたので、きちんと取材してほしかった。そのほか、永井アナウンサーがスタジオセットを指し示すときに人差し指だけを使うことがあり気になった。また、視聴者層を考え

ると「リノベーション」「サステイナブル」といったことばは日本語に訳して紹介したほうがよいと思う。

○　永井アナウンサーと村山さんが番組冒頭で「サステイナブル・ツーリズム」についての説明や定義づけをしていたため、スムーズに内容を理解することができた。また、事例の紹介も地域側と消費者側という両方の視点から伝えていたことがよかった。髙岡さんの「何億円お金出しても買えない歴史がこの町にはいっぱいあります」「古民家や文化財はもともとつかわれていた用途があるわけで、それをもう一回よみがえらせたら長くもつと思います」ということばが印象的で、大洲市が世界の持続可能な観光地トップ 100 に選ばれたことに納得できた。外国人観光客の受け入れはことばの壁が課題だと思うが、上勝町の事例において英語を話していた女性たちのバックグラウンドがとても気になった。最後に４つの課題に対して村山さんが回答していく場面では、時間がなく十分に説明できていなかったと感じた。

（ＮＨＫ側）

観光をテーマにしたのは、全国旅行支援やインバウンド再開、円安によって観光が地域経済の再生につながると考えたからだ。指摘のとおり、大洲市の事例では取り組みを始めたきっかけや経緯、課題をもう少し掘り下げて伝えるべきだったかもしれない。また、食事のシーンももう少し丁寧に伝えるべきだったと反省している。四万十市の川漁師体験ツアーは取材したときに観光客がいなかったため資料映像を使用した。英語でガイドをしていた上勝町の女性は、海外で地域の再生などに取り組んできた方である。このように上勝町では持続可能な社会の実現に貢献しようという若者が移住してきている。また、課題の説明が駆け足になり十分でなかったことも反省点である。限られた時間で何を優先して伝えるべきか番組ホームページの記事の活用方法を含めて考えていきたい。

○　コロナ禍を経て、地域側と消費者側に「サステイナブル・ツーリズム」への意識の変化が生じていることを感じた。大洲市の事例では、文化財や歴史的建造物をホテルにリノベーションしたり、夕食をあえてホテルの外に設置した会場で食べてもらったりと、町全体が一体となり地域を盛り上げる様子が新鮮だった。「観光地にするのが目的ではなくて、観光は手段だと思っています。目的は歴史文化の保全と地域経済の活性化なんです」という髙岡さんのことばが大変印象的だった。また、「旅のだいご味は人」「旅の中で何人の地元の方と出会えるかが満足度と正比例する」という村山さんのコメントには共感した。永井アナウンサーは存在感があり、オープニングやエンディ

ングは彼が進行を担当しているからこそこのような構成だったのだろう。ただ、香川県の事例も紹介されるとよかったと思う。

○　どのような取り組みが「サステイナブル・ツーリズム」になり得るのか実感がわく内容だった。このような情報を知る機会はまだ少なく、海外から需要があることも想像しにくいため、価値のある内容だったと思う。大洲市の事例では古民家をリノベーションした高級施設が紹介されていたが、冒頭ほこりが舞っている映像を使用した意図が気になった。ＱＲコードを効果的に使っていたと思うが、パートごとにリンク先が変わっているのが分かりづらかった。また、大洲市と上勝町のパートの記事には新しい情報がほとんどなく残念だった。最後にアンケートに寄せられた課題に対して村山さんに意見を聞いていた点はよかったが、時間が若干短かったと感じる。オープニングが少し長く感じたためそこを削って終盤の時間を増やすほうがよかったと思う。

○　四国のこれからの観光の形が見えてくる内容だったと思う。課題先進地ともいわれる四国には「サステイナブル・ツーリズム」の考え方が適合していると感じた。シーンごとに明確な区切りがありとても分かりやすく、村山さんの端的なことばとキーワードで情報を整理しながら見ることができた。サステイナブルな旅が重要であると回答している人が多い一方で、実際の需要には必ずしも結びつかないことが予想されるため､目的と手段を切り分けて考える髙岡さんの視点はとても大事だと感じた｡ただ、大洲市の事例では、現在の観光の形にたどり着いた経緯について触れられるとよかったと思う。また、大洲市の事例から上勝町の事例に移るときに、永井アナウンサーが「いま旅行者側から見ていきましたけれども」とコメントしていたが､その「旅行者」が誰を指すのかが分かりづらかった。旅行事業者を指しているのであろうが、観光客と混同してしまうのではないかと感じた。

○　時間を感じさせない魅力的な内容だった。スタジオの解説が分かりやすく、アンケートが効果的に使われていたと思う。大洲市の事例では、行政と民間が１つになって取り組んでいることがよく分かった。大洲市が世界の持続可能な観光地トップ100 に選ばれたという紹介があったが､こういった情報は今後も積極的に取り上げてほしい。上勝町の事例では、施策の紹介と合わせて昔ながらの日本の文化の魅力が伝わってきた。もう少しテーマを絞ってもよかったと思う一方で、香川県の事例だけがないことは残念だった。また、随所に「お金を落とす」という表現があったがとても不快に感じた。このような表現には注意してもらいたい。そのほか、紹介された観光には障害者でも行けるのかという視点があるとよかった。最後に、カタカナや専門用語は分かりづらいことがあるので、一般の視聴者が理解しやすい表記を

してほしいと思う。

○　全国各地で観光客が戻ってきている中で非常にタイムリーな番組だったと思う。観光の視点だけでなく、経済や社会とのバランスを意識した中長期的な取り組みを目指していくことが特徴としてあげられ、その中で四国のさまざまな事例が紹介されていたが、少し内容が盛り込まれすぎていると感じた。一つ一つを掘り下げてテーマを絞るほうが、視聴者は理解しやすかったと思う。最後にアンケートから出てきた４つの課題が提示されていたが、それに対する村山さんの回答があっさりと終わってしまった印象がある。それぞれの地域が「サステイナブル・ツーリズム」を始めたきっかけやプロセスを把握することで課題の本質が見えてくると思う。今後はそのような課題を解決するためにはどうすればよいのかという視点で番組を作ってほしい。

○　「サステイナブル・ツーリズム」についての教科書になるような内容で、今後インバウンドの回復が期待される中で時宜を得た内容だった思う。画面に表示されたＱＲコードからアンケート調査の結果を見ることができてとても参考になった。ただ冒頭で、今なぜ「サステナイブル・ツーリズム」が注目されているのかもう少し説明したほうがよかったと思う。フラッシュのように説明が流れてはいたが、あれだけでは理解できないと感じた。大洲市や上勝町が成功しているのは地域独自の強みがあったからであり、他の地域が同じ手法をとるのは難しいかもしれないと感じる。髙岡さんの話から、プロジェクトへの熱い情熱と理念がよく伝わってきたが、観光には関係のない住民の声も聞きたかった。また、今後にむけて４つの課題が示されたが、それに対する答えがあまりにも安直だった。別の番組で課題を掘り下げることにして、今回は問題提起で終えるべきだったと思う。

（ＮＨＫ側）

たしかに最後に課題を４つ提示するよりも、１つの課題を掘り下げて解決策を探っていくほうがよかったかもしれない。ＱＲコードのリンク先の記事の内容については指摘も踏まえて検討していきたい。限られた要員の中で、デジタル展開をどのように充実させるのかは今後の課題と認識している。また、カタカナ表記が分かりづらいこと、専門用語が多すぎることについて指摘も踏まえて、分かりやすく情報を届けられるように今後工夫していきたい。なおオープニングの音楽は、担当ディレクターの発案から若者に人気の映画の主題歌を使用した。これまでも四国が抱えるさまざまな課題に焦点を当ててきたが、１度取り上げるだけでは解決することが難しいた

め、繰り返し放送して視聴者と一緒に課題を解決していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　徳島局の「とく６徳島」は１日の徳島の出来事が分かるので録画して見るようにしている。
　大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」はテンポよく進み、想像していなかったストーリーも出てきたのでおもしろかった。

○　大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」は前半のホームドラマ感と後半のどろどろしたシリアス感のどちらもよかった。「新選組！」や「真田丸」も好きだったため、また三谷幸喜さんが脚本を手がける大河ドラマを見たいと思っている。
　ことしも１２月２６日(月)と２７日(火)の「岸部露伴は動かない」（総合 後 10:00～10:54）を楽しみにしている。

○　滞在中のドイツでもＮＨＫの「ワールドニュース」を見ることができる。アナウンサーは現地のことばを話すが、映像では日本語が流れているので分かりやすく安心できる。

○　１２月９日(金)のひめＤＯＮ！「もう一度、俳句甲子園～伯方分校のエースはいま～」を「ＮＨＫプラス」でみた。１０月１日(土)の「いつもそばに、１７音がいた～俳句甲子園２０２２～」（Ｅテレ 後3:20～4:04）で出演していた愛媛県立今治西高校伯方分校の俳句部部長である馬場叶羽さんが紹介されていたが、１０月の放送だけでは分からなかったことや馬場さんの俳句のすばらしさを改めて知ることができた。

○　同じく「もう一度、俳句甲子園～伯方分校のエースはいま～」を見た。馬場さんは、ことし７月に専門誌の特集で未来を担う１０代の俳人の１人に選出されたということで、「いつもそばに、１７音がいた～俳句甲子園２０２２～」の放送で出演していたときから気になっていた。大阪から伯方島へ移り住んで彼女の俳句がどのように変わっていったのかがよく分かり、楽しんで見ることができた。また、「俳句甲子園」の仕組みや審査の様子などの紹介もあったため、この大会を知らない人でも見やすい内容になっていた。他県の視聴者にもぜひ見てほしい番組だと思った。馬場さんは高校３年生でもう伯方島を離れてしまうようだが、今後の彼女も取材してほしい。

○　目線がどこにあるのか明確でない番組が多いと感じる。テーマを掘り下げずに一般

の視聴者が見やすい内容にしたり、掘り下げて専門家が見るような内容にしたりと、もう少しターゲットを定めてもよいと思う。

○　１１月１５日(火)のワイルドライフ「四国の小さな入り江　テンジクザメ　集結の謎を追う」（総合 前0:25～1:24）を見た。四国南東部に、世界で唯一「テンジクザメ」が産卵に集まることで知られる入り江があるということだが、非常に珍しい内容で景色の映像も印象的だった。卵がふ化するまでのサメの試練も紹介されており、自然の厳しさ、その中で生きることの大切さが伝わり感動した。四国の魅力を再確認できたと感じている。機会があれば四国の放送局でも取り上げてほしい。

○　１２月９日(金)のさぬきドキっ！「レイザーラモンＲＧのあるあるバイク旅ｉｎ香川　前編」を見た。２泊３日で香川県内の全市町（島しょ部以外）をバイクで巡り、地元の人と語らいながら各地の「あるある」と魅力を探り出していく内容で、２０２１年４月２３日(金)の「四国あるある選手権」（総合 後7:30～7:57四国ﾌﾞﾛｯｸ）よりもレイザーラモンＲＧさんのキャラクターが活かされていたと思う。また、これまで見てきた四国の旅番組では自転車や公共交通機関を使用していたが、バイク旅にしたことで行動範囲が広がりより多くの情報が紹介され、バラエティーに富んだ内容になっていたと思う。今回は６つの市町を巡っていたが、テンポよくまとめられており、軽いタッチで見やすかった。さまざまな移動手段を活用して地域の魅力を発信していくことは、見えてくる景色が変わるためおもしろい試みだと思う。四国の他の３県でも挑戦してほしい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２２年１１月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、２１日(月)、東京第一ホテル松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった「もっと四国音楽祭２０２２」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１２月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	半井　真司	（四国旅客鉄道 取締役会長）
委　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜「もっと四国音楽祭２０２２」（総合　１０月２８日(金)）について＞

○　地域を身近に感じる内容でとても楽しめた。地元の有名なアーティストから若いアーティスト、学生が立場を越えて共演していて夢のある光景だった。演歌歌手の三山ひろしさんと瀬戸内を拠点とするアイドルグループのＳＴＵ４８が「瀬戸の花嫁－もっと四国Ｒｅｍｉｘ－」を歌っていたが、ここは特によかったと思う。高知県出身で高校生シンガーソングライターのＹＵＲＡさんと愛媛県の学校の合唱部が共演するシーンはとてもよい雰囲気だったが、合唱部の生徒も出演者としてマスクを外せるとよかったと感じた。ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮＳ　ｆｒｏｍ　ＥＸＩＬＥ　ＴＲＩＢＥでリー

ダーを務める愛媛県松山市出身の白濱亜嵐さんが登場して、八幡浜市出身で走り幅跳びの吉良龍星選手にエールを送るシーンは、両者のつながりがあまり感じられず違和感があった。また、「四国のお祭り打ち上げメドレー」で登場した香川県の獅子舞についてはもう少し詳しく紹介してほしかった。

○　「次のステージへ、いっしょに。」というテーマのもと前向きなメッセージが伝わってきて元気をもらえた。学生が出演した後半の舞台では新しい光と若者の力を感じた。南原清隆さんの温かい司会、三山さんの力強い歌声、愛媛県出身でタレントの友近さんのユーモアあふれる企画などベテランの安定ぶりも光った。終始明るい雰囲気でとてもよかったと思う。賛否両論があった中で３年ぶりに各地で開催された祭りが紹介されていたが、それぞれ力強く披露されていて今後の開催にむけて勇気づけられる内容だったと思う。最後にアンジェラ・アキさんが作詞・作曲したＮＨＫ四国のテーマソング「ふるさとの色」を出演者で歌っていたが、視聴者に伝えたい思いを再確認できるようなシーンでよかったと思う。

○　高知県出身でソプラニスタの岡本知高さんの圧巻の歌声や、三山さんの「ビタミンボイス」もたくさん聞くことができて満足のいく内容だった。愛媛県出身で中学１年生の宇都宮聖さんのコーナーでは歌唱力にも驚いたが、エピソードに涙を誘われた。突然母親との別れが訪れることがあるということは特に同世代には響くものがあるだろう。「四国のお祭り打ち上げメドレー」では身近な地元の祭りが紹介されていて親近感がわいた。友近さんのコントを交えた進行も見る人が楽しめる演出だったと思う。「もっと四国音楽祭」を視聴したのはこれが３回目だが、毎年、出演者の変化や成長などを見ることができて楽しい。今回は「次のステージへ、いっしょに。」というテーマだったが、視聴者に届けたいメッセージは伝わっていると思う。ただ、ステージでの歌唱は出演者間の歌唱力の差がはっきりと表れるため気になってしまった。

　今後の音楽番組について、四国各県出身のアーティストが平等に出演しているとよいと思うが、もともと数に偏りがあるであろうし、難しいかもしれない。演出面では、オーソドックスな歌番組にまとめる方法もあれば、ドキュメンタリー風に１人に密着する方法もあり、どちらを選択してもよいと思う。

○　小さいころから美声で有名な宇都宮さんの紹介は印象的だった。５歳のときに母親を亡くし、祖母たちに育てられた話は感動した。宇都宮さんの歌に対する姿勢がよく伝わる内容だったと思う。白濱さんが吉良さんにエールを送るシーンでは、ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮＳの印象が強く吉良さんの存在が少し薄まってしまったと思う。「四国のお祭り打ち上げメドレー」では、コロナ禍で自粛となってから３年ぶりに開催となった各地の祭りを紹介していたが、伝統行事を継承することの重要性を改めて感じた。

各コーナーが異なるメッセージを持っていて統一感がないように見えたが、最後の「ふるさとの色」の合唱によってまとまりのあるフィナーレに仕上がっていたと思う。

○　四国出身である南原さんと首藤奈知子アナウンサーの軽快で安定感のある進行は非常によかった。ＳＴＵ４８など地元出身のアーティストの出演や地域の身近な話題の紹介などは親近感がわいた。高齢化が進む中で、四国の若い人が多く出演していたのは希望がわいた。四国が持つ多様性を音楽や祭りを通して表現できていたと同時に、各県に独自の特色がありまとまりがないとも言える四国に、四国としての１つのアイデンティティーを作りたいという思いが伝わってきた。「ふるさとの色」は、四国を象徴する歌になる可能性があると感じた。このような番組はＮＨＫだからこそ作れるものだと思う。毎年新鮮さを維持していくことは大変だろうが、次回も期待している。

○　５回目の放送となる今回のテーマは「次のステージへ、いっしょに。」であったが、コロナ禍を乗り越え次のステージへ進んでいこうという、明るく前向きな番組になっていたと思う。昨年に続きコロナ禍での公開収録であったが、感染対策と番組制作が違和感なく両立できている印象を受けた。パフォーマンスを披露する前に関係者を丁寧に取材し、ストーリー性を持たせることにより、曲の歌詞や雰囲気に引き込まれる構成となっていた。このような構成は他の音楽番組には見られない大きな特徴であるため、今後もこの形を続けてほしい。どのコーナーも印象的であったが、特に「四国のお祭り打ち上げメドレー」は圧巻で元気をもらえた。今後も将来性のある四国出身のアーティストの発掘や、四国の知名度向上などに取り組んでほしい。

（ＮＨＫ側）

四国出身の方に出演してもらうことにこだわり、そのうえで幅広い世代に見ていただけるような人選にした。周知広報の面では、特に若年層を意識して屋外やＳＮＳで告知を行い、これまでよりも多くの若い人に見ていただけた。指摘のあったＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮＳのコーナーについては、白濱さんが愛媛県出身ということで出演を依頼し、番組テーマに基づき若い世代を応援する企画とした。今後の活躍が期待される愛媛県出身の方を探し、今回は陸上でオリンピックを目指す吉良さんに出演してもらった。演奏がスタジオ収録ということで、確かに他の企画と比べて、少し違和感があったかもしれない。ただ、ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮＳの出演そのもので若い世代の注目を集められた点はよかったと思う。また香川県の獅子舞については、指摘のとおり少し説明不足だった点があったと感じている。四国は多様性があり、一方でまとまりがないという話があった

が、今後も四国の個性を生かしつつ一体感のある番組を作っていきたい。

○　岡本さんが歌った「Ｗｏｒｌｄ　ｉｎ　ｕｎｉｏｎ」は圧巻のパフォーマンスで最も印象に残った。そのあとのトークも四国にちなんだ話題で聞きやすかった。四国の次世代のアーティストということで中学生の宇都宮さんが出演していたが、将来を期待させるような力強い演出でよかった。ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮＳのシーンは、四国出身のスポーツ選手を応援する歌があるとよかったかもしれない。「ふるさとの色」の合唱シーンでは、岡本さんがいないことが気になった。また、ここで合唱に秀でた四国の中学校や高校と共演する企画などがあれば、番組への出演が学校側の目標になってよいかもしれないと思った。最後に、タイトルが音楽祭なのでもう少し多くの人に歌ってもらったり、歌唱曲数が多かったりするとよかったと思う。

○　三山さんや岡本さんの歌唱は圧巻だったが、２人が高知県出身であることはあまり意識していなかった。自分の出身地のアーティストは知っているが、四国に広げると知らないという人もいると思うので、このような番組は四国のアーティストについて知るよい機会だと思う。若い世代の力が存分に発揮されていたが、中でも５歳で母親を亡くし、歌詞を伝えることを大切にしている宇都宮さんのシーンは特に印象的だった。笑いの部分では、友近さんの「中高年アルバイター・西尾一男」のキャラクターが際立ち、それがそのあとの「四国のお祭り打ち上げメドレー」にうまくつながっていた。ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮＳのシーンでは、私も吉良さんの出演理由が気になった。生のステージが中心の構成だったが、ドキュメンタリーを見ているような丁寧な作りでとても好感が持てた。この盛り上がりは、司会からパフォーマンスまで全力で挑んでいた南原さんの存在が大きかったと思う。

○　世界の第一線で活躍している人からこれから羽ばたこうとしている若い人まで同じ舞台で歌えるということが、「もっと四国音楽祭」の１つの魅力であると感じた。テーマが「次のステージへ、いっしょに。」だったが、出演者が同じ舞台に立っている様子はコロナ禍を経て先の光が見えてきていることを実感させてくれた。「いっしょに。」の意味もよく伝わる内容だった。「四国のお祭り打ち上げメドレー」では、友近さんの軽快な進行からパフォーマンスへ切り替わっていく流れが大変よかった。ＹＵＲＡさんや宇都宮さんなど、若い人たちを四国全体で応援していくこともこの番組の目的だと感じた。ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮＳのコーナーについては、私もなぜ吉良さんが選ばれたのか違和感があった。「ふるさとの色」の合唱シーンでは、四国の一体感を感じることができた。県をまたいで一体感を持てるのは四国ならではの感覚だと思う。

○　出演者数は多くなかったが、いろいろな歌を楽しめた。昨年の放送では「ふるさとの色」を強く推す企画が多かったり、ドキュメンタリーの時間が長すぎたりと飽きる瞬間があったが、ことしは切り替えが早くてよかった。中でも、「四国のお祭り打ち上げメドレー」での祭りの紹介が、ドキュメンタリー風ではなく友近さんの寸劇であったのはとてもよかった点で、番組が一本調子にならずに済んだと思う。「ＮＨＫ紅白歌合戦」の縮小版という雰囲気で見られてよかったが、地方のホールが会場ということもありセットや演出に限界を感じる部分があった。ただ、地方の番組としてはあれで十分なのかもしれないと納得はしている。生のステージだったためか、特に他人の楽曲を歌う場面で歌唱力が伴わず見劣りしてしまったシーンがあったのは残念である。最後の「ふるさとの色」の企画では、ＶＴＲ出演にとどまらずぜひアンジェラさんにも歌ってほしいと感じた。

○　コロナ禍で３回目の音楽祭だったが、毎年上手にテーマが設定され、人選もうまく行われていると思う。３年ぶりに有観客で開催されたが、南原さんと首藤アナウンサーの安定感のある進行、友近さんの軽妙なトークが加わって音楽祭らしい番組になっていた。ただ、例年出演者がほとんど同じで出し物も定番化しているため、内容を刷新することが必要ではないだろうか。各アーティストのインタビューは時間が長く、間延びしているように感じた。「ふるさとの色」の合唱シーンでは、歌詞の合間に四国の風景映像を挟んでもよかったと思う。出演した歌手は愛媛県と高知県出身の人ばかりで、香川県と徳島県からすると寂しさを感じたかもしれない。南原さんの多彩な才能には驚かされるが､回を追うごとに南原さんへの依存度が高まっている印象がある。また、同じ学生でも立場の違いでマスク着用の有無に差がある点が気になった。

四国各県に特色があることはよいことなので、各県の対抗戦的な要素が入ってもよいと思う。無理に一体感を出して収めようとすることが、新鮮味がなくなる原因になりうると考える。また、世代ごとに好きなアーティストは多様であるため、視聴者から番組に出演してほしいアーティストを募集するという手もあると思う。

（ＮＨＫ側）

音楽祭というタイトルではあるがドキュメンタリーも入れているため､歌とのバランスは今後も考えていく必要があると思う。「四国のお祭り打ち上げメドレー」では、それまでのトーンから大きく変えることで勢いを出すことをねらったが、好評の声を頂けてよかった。つなぎの部分も友近さんのおかげで非常におもしろく仕上がったと思う。「ＮＨＫ紅白歌合戦」の縮小版のように感じたという声もあったが､四国全体で盛り上がれる場を作りたいと思っていたので、

そのような印象を持ってもらえたのは大変ありがたい。「ふるさとの色」の合唱シーンで四国の風景映像を入れるのは確かによかったかもしれない。マスク着用の方針についてだが、感染対策のためステージ上に出てくる出演者のみマスクを外し、それ以外の合唱者や踊り手はマスクを着用するという形にせざるを得なかった。５回目の放送と１つの区切りをむかえたが、今後も意見を頂きながら新たな挑戦をしていきたい。四国各県が持つ特色もうまく生かしていきたいと思っている。

＜放送番組一般について＞

○　１１月２０日(日)の「ＦＩＦＡワールドカップ２０２２」(総合 後11:00～21日(月)前3:10)を見た。松山局の宮本真智アナウンサーが出演していて親近感を覚えた。
また、ＮＨＫの天気予報で、全国各地の紅葉の名所がどのぐらい見頃を迎えているかという情報があると、県外へ旅行に行く人にとって有益だと思う。

○　１０月２１日(金)のノルノルミシル！「徳島 鉄道の旅」（前編）を見た。今回がシリーズ４回目の放送だったが、大幅な改善が見られた。訪問先を決める要素となる「ミッション」の数を以前より減らし、１泊２日の旅にして前後半で２回に分けていた。また「ミッション」の選択では、くじ引きでランダムに決定することをやめて、移動による無駄な時間を省いていた。これにより一つ一つの「ミッション」の放送時間が長くなり、地域の魅力や公共交通を使った旅の魅力がうまく出せていたと思う。同時に、タレントのユージさんのキャラクターもさらに引き立ってきていると感じた。

（ＮＨＫ側）

「ノルノルミシル！」はこれまで頂いた意見を生かした結果、流れがスムーズなってきていると思う。今後もこのような形で続けていきたい。

○　１１月１１日(金)のとさ金「こうち３４の未来－移住－」を見た。移住に対する行政の力の入れ具合が昔と格段と違うことを実感したと同時に、裏を返せばそれだけ人口流出が進んでいることが分かる内容だった。移住について取り上げるときには、市町村間の取り組みの特色を競い合うような内容になっているイメージがある。しかしこの番組では、高知県の各市町村が互いに連携しながら移住者目線で政策に取り組んでいることがうかがえる内容でとてもよかったと思う。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２２年１０月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１７日(月)、東京第一ホテル松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった「いつもそばに、１７音がいた ～俳句甲子園２０２２～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、１１月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	半井　真司	（四国旅客鉄道 取締役会長）
副委員長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜「いつもそばに、１７音がいた ～俳句甲子園２０２２～」
（Ｅテレ　１０月１日(土)）について＞

○　高校生の青春と俳句を結び付けたきれいな構成で、感情移入しながら見ることができた。過度に作りこまずにありのままの高校生の姿が映し出されていたと思う。登場する句の背景がしっかりと語られていて、その句を高校生同士がどのように評価するのかも分かったため、俳句をよく知らない視聴者も見やすい内容だったと思う。終盤の「俳句甲子園」の大会映像がやや短かったが、随所で大会のことが分かる構成だったためきちんと伝わってきた。一方で、数ある学校の中から取材対象をどのように決

めたのか気になった。また、福島県立磐城高校の髙橋ひよりさんが詠んだ「竜淵（ふち）に潜む避難区域の町」の句にある「竜淵に潜む」は、髙橋さんが考えたことばではなく大会で指定された季語であることが後半で説明されていたが、この句が紹介されたタイミングで知りたかった。

○　各地の高校生活がかいま見えて新鮮だった。思春期の子どもたちの撮影は大変だろうが、丁寧に取材をしている印象をうけた。畜産農家の子どもで獣医を目指す生徒や、東日本大震災を題材に句作した生徒など、個々のエピソードから句の裏側を知ることができてよかった。一方で、青森県立弘前高校の佐藤光太楼さんが不登校になった友達について言及するシーンがあったが、目隠しはしていたもののその友達の写真が映っていた点が気になった。デリケートな内容なので、話の中だけでの紹介にとどめるべきだったかもしれない。また、「俳句甲子園」そのものの紹介が少なかったため、もう少し説明を加えたほうがよかったと感じた。「俳句甲子園」の仕組みが理解できている人は違和感なく視聴できるが、初めて知る人にとってはディベートを通して勝敗が決まることなどを伝えたほうが見やすいと思う。

○　句に特徴が感じられるおもしろい高校生に密着していたと思う。タイトルや、俳優の飯沼愛さんのナレーションから若々しさが感じられたうえ、ほとんどが高校生の視点で描かれていたため、高校時代に戻ったような気持ちで視聴することができた。一方で、他の委員が指摘していた「竜淵に潜む」の句もそうだが、取り上げた句の中で「俳句甲子園」のための句とそうでない句があったため、大会で指定された季語が入った句はそれが分かるような説明を加えるとよかったと思う。また、愛媛県立今治西高校伯方分校の俳句部部長である馬場叶羽さんの句の紹介シーンで、画面上に同時に７つの句を表示していたが、すべて読むには時間が短かったためもう少し数を減らしてもよかったと感じた。高校生にとって俳句に対するモチベーションが高まる内容であったため、学校現場で利用できるような形で番組が残るとよいと思う。

○　それぞれの生活環境の中で自分と向き合い、悩み、友達と真剣に議論する様子が非常にうまく映し出されていた。新型コロナウイルスの感染拡大が高校生たちの活動に大きな影響を及ぼしたことも伝わってきて、感情に訴えかけてくるとてもよい番組だと思った。馬場さんに密着したシーンでは、俳句に真剣に向き合うことで、その人の感性や感覚がうまくことばとして映し出されていく様子が感じ取れた。また、飯沼さんの「こんなにも自分をさらけ出せる。勝敗を超えて分かり合える。俳句はそんな青春の日々を映し出す鏡だ」という最後のナレーションは非常に印象に残った。ただ、審査員の句に対する評価や学校間のディベートの様子などは非常に興味があったため、「俳句甲子園」の大会の模様が分かるシーンが少なかった点が残念だった。

○　「いつもそばに、１７音がいた」というタイトルが非常によかった。現実の高校生と、日常には見えづらい１７音に込めたもう１人の高校生とを重ね合わせて見ることができた。４人の高校生それぞれが俳句と違った向き合い方をしていたことは興味深かった。また、一人一人が自然体で描かれていて大変好感が持てた。コメンテーターやゲストなしでの進行は、高校生たちのことばや込められた思いに集中することができてよかったと思う。一方で、紹介する高校生の人数を３人にして、ライブ感が伝わる「俳句甲子園」の大会の模様をもう少し長く放送してもよかったと感じる。また、佐藤さんが不登校の友達について言及するシーンは私も気になった。身近な人が映像を見れば顔が隠されていても誰だか分かる可能性があるので、配慮するべきだったかもしれない。最後に、四国にゆかりのある「○○甲子園」という高校生の大会がほかにもあれば、ぜひ今後も取り上げてほしい。

○　大会出場前の様子から丁寧に取材していたことで、等身大の高校生の姿がよく伝わってきた。高校生のひたむきな姿勢と取り組みに触れることができて、視聴してよかったと思えた。句に数分間の説明動画がついていると、作者の意図や思いがよく伝わると感じた。俳句作りを通して、最近の高校生が何を考えているのか、どのような体験をしているのかが理解できた気がする。お互いの体験や考えを真剣に聞き合い議論するというのは現在の学校教育で推進されている「主体的・対話的で深い学び」に通じており、それが俳句創作の本質なのだろうと感じた。全国の高校生の俳句創作の場であり、出場することが励みになっている「俳句甲子園」は四国の宝で、改めて応援したいと思った。

（ＮＨＫ側）

「俳句甲子園」の番組は毎年放送している。いつもは「俳句甲子園」の大会の模様を中心に伝える内容だが、今回は思い切ってだいご味であるディベートのシーンを一切描かず、高校生の日常に焦点をあてることに挑戦した。その中で「俳句甲子園」の話をどこに入れるのかは悩んだ点である。指摘のあった通り、「竜淵に潜む」の句の紹介の前に大会について紹介したほうがよかったかもしれない。また、取材対象者の選定は、日常との結び付きを句でいかに表現しているかという点を軸に行った。不登校の生徒のプライバシーに関する問題については、放送にあたり十分に注意した。ただ、確かに不特定多数にさらされるという意味においては、もう少し配慮が必要だったかと反省している。ちなみに、愛媛県新居浜市では「溶接甲子園」というものがあり今年番組で取り上げた。ほかの「○○甲

子園」も見つけたら、ぜひ番組で取り上げたい。

○　「俳句甲子園」はこれまで新聞やテレビでよく目にしていたが、主に愛媛県内の高校生たちに焦点が当てられていたため、他県の高校生たちが多く登場するこの番組は新鮮だった。取り上げていた高校生はそれぞれ個性的で人選のよさに感心した。印象的だったのは、東日本大震災について髙橋さんが「県外から見たらかわいそうな子フィルターがかかっていると思う」と言ったシーンで、自分自身もそのような目で見ていると気付かされた。また、「今までの震災への向き合い方は少し離れすぎていた。そこから逃げ続けていたのが無責任だったと思う」と自分の境遇を受け入れていく様は心に残った。俳句は読み手が自由に解釈してよいものだが、今回のように作り手の意思を知ると理解が深まる。ただ、「俳句甲子園」についてよく知らない人のために、前半に説明をいれてもよかったと思う。

○　番組名とタイトルロゴのデザインが非常に爽やかでよかった。冒頭が「俳句甲子園」の説明ではなく、北海道の高校生の紹介であったのは意外性があり新鮮だった。続いて福島県の高校生の句の解釈について議論があったが、この２校の紹介の後に「俳句甲子園」の映像が続き、飽きさせない構成だったと思う。その後の青森県の高校生の紹介では、俳句作りを身近に感じられる内容になっていた。そして最後の愛媛県の高校生の紹介では、他の３校とは異なり馬場さんのみに焦点を当てており、それぞれ違った角度から話が展開されていてよかった。ただ、紹介する高校について、西日本の学校をもう１校紹介してもよかったと思う。俳句に対して深い知識がない視聴者にも、俳句を通して高校生の日常の悩みや苦しみが伝わったと思う。最後の「俳句甲子園」の映像では、コロナ禍で行動が制限されてきた高校生たちが青春を楽しむ様子に胸が熱くなった。

○　高校生を取り上げている番組にしては少し暗い始まり方である印象を持ったが、徐々に高校生が感じている俳句の世界が伝わってきて、見終わったあとには納得できた。冒頭の落ち着きは、静寂の中から物事を捉える高校生たちの熱量を際立たせるものになっていたと思う。紹介していた高校生たちの表現力には驚いた。また、前向きなことだけでなく負の思いを放送に出せる意思の強さにはとても感心した。これだけの思いを引き出したのは、高校生たちのことを深く取材し、真剣に向き合った結果なのだと思う。紹介していた高校に感情移入していたこともあり、この高校生たちの句を打ち破って優勝した句の内容を知りたくなった。他の委員から大会で指定された季語の説明のタイミングについて指摘があったが、私はあまり気にならなかった。番組名もすばらしく、高校生の「俳句甲子園」を十分に表現できていたと思う。

○　高校生が学校生活を送る中で感じている喜びや悩み、人生観などをうまく表現できていたと思う。俳句に込められた思いや背景を深く理解できる内容だった。かなり深く取材できていて、東日本大震災の被災地で暮らす生徒や、伯方島に俳句留学をしている生徒など、大変興味深く視聴することができた。多感な年頃の高校生がここまで本音を出しているのは、取材側の真剣な姿勢が伝わった結果なのだろうと感心した。季語の説明のタイミングについてだが、最初に句を出して意味を視聴者に想像させる構成になっていたと思うので、私はあの順番でよかったと思う。一方で、「俳句甲子園」を全く知らない人のために、最初に簡単に大会についての説明があるとよいと感じた。このような地域の文化的行事はしっかり応援をしていきたいと改めて感じさせる内容だった。

○　タイトルから「俳句甲子園」の対戦風景を中心に優秀作品を紹介する番組だと思い込んでいたが、よい意味で期待を裏切る内容だった。大会にあまり触れないことでむしろ今の高校生の悩みがよく伝わってきた。ナレーターに同世代の飯沼さんを起用したことも効果的だったと思う。紹介していた４人はそれぞれが違った特徴を持っていたが、いずれもこれまでの体験から今の学校生活があり、それが作風にも反映されていることがよく分かった。この人選が番組のよさにつながったと感じる。大会前からの丁寧な取材で高校生たちと信頼関係を築けたことが、照れも気負いもない素直なことばを引き出すことにつながったのだと思う。大会終了後の４人の感想を映し出したシーンは、タイトルの「いつもそばに、１７音がいた」にふさわしい締めくくりだった。高校生たちが素直な感情を語っていただけに、ネット上で不利益を被ることがないことを願っている。

（ＮＨＫ側）

大会自体の取り上げ方についてだが、ここ何年かの番組で最も取り上げる時間が短い。「俳句甲子園」の事務局がどう受け止めるか心配だったが、放送後は好意的な感想を頂けたのでその点ではよかったと思っている。次に人選についてだが、ほかにもたくさんの候補者がいた。地域バランスや男女比をどうするかは本当に悩んだが、やはり人生と俳句がいかに密接に関わっているかということに重きを置いた。ちなみに、大会で最優秀句や優秀句に輝いた句は決して難しいことばを使ったり、奇をてらったりしておらず、自分自身のことを本当に素直に詠んでいるように感じた。生徒にインタビューしたときには、自分の考えを言語化して表現する能力の高さに驚いたが、そのような生徒たちのたくさんの句を見ることができたこと

は制作へのよい刺激となった。

＜放送番組一般について＞

○　天気予報で波の高さを表記するデザインが非常に見にくいと感じる。小さい画面でみたらなおさら見にくくなると思う。

（ＮＨＫ側）

天気予報の画面については、目の不自由な人や高齢者でも見やすいようなユニバーサルカラーを使用している。しかし、確かに小さい画面だと見づらいということもあるかもしれないので、頂いたご意見は次の番組改定に向けて参考にしたい。

○　今ではすっかり慣れて違和感はないのだが、初めてＡＩがナレーションしているのを聞いたときには驚いた。このように時代は進化していくのだと実感した。

○　９月３０日(金)の「ＨＥＮＲＯを世界の中心に！ＩＴで四国遍路をアップデート」(総合 後 7:30～8:13 四国ﾌﾞﾛｯｸ)を視聴した。外国から遍路に来る人に向けて、地域の情報を確認したり、宿泊予約の代行を依頼したりできるアプリを作成する取り組みを紹介していた。遍路を世界に広めて多くの人に来てもらうことを目的としたすばらしい活動だが、今後アプリの機能を充実させて広く活用されるように訴求していくことが最も重要だと思う。似たようなアプリはすでにたくさん存在しているが、世に知られていなくて活用されていないのが実情である。遍路といえばこのアプリと言われるまでに育てていく必要がある。加えて、遍路を持続可能な観光資源にするためには、アプリの制作だけでなく遍路道の整備や宿泊施設の存続、地元住民との共生など、ＩＴ技術だけでは解決できない課題にも向き合わないといけない。そのような視点でも番組を作り、解決の方向性を探ってほしい。

（ＮＨＫ側）

今後のアプリの運用は課題解決を目的に地域の人たちが主導することになっていて、前向きに進めていきたいという話をしていた。また、ＩＴ技術では解決できない問題はたくさんあると思うので、引き続き取材を進めていきたい。

ＮＨＫ松山放送局

番組審議会事務局

２０２２年９月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１２日（月）、東京第一ホテル松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、２０２１年１２月２６日（日）に放送したＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」へのＢＰＯ意見について報告があった。続いて、２０２２年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、２０２３年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。続いて、事前に視聴してもらった四国らしんばん「ＨＥＮＲＯ　世界に聞いたその魅力」について活発に意見の交換を行った。

最後に、１０月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	半井　真司	（四国旅客鉄道 取締役会長）
副委員長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜「２０２２年度後半期の国内放送番組の編成」および
「２０２３年度の番組改定について」＞

○　若年層のテレビ離れが進む中で、自分の興味がある情報しか取りに行かないという傾向がとても強くなっていると感じる。思わぬ情報に出会える番組に関心をもってもらうための接点を作っていくことが非常に重要だと思う。

○　番組自体がすばらしくとも、どのように視聴誘導するのかが難しいところだと思う。ＳＮＳの活用など、若年層へのアプローチに関する工夫を知りたい。

○　「理想的本箱　君だけのブックガイド」について興味深く感じた。

○　去年盛り上がりを見せた東京オリンピック・パラリンピックの熱が今ではすっかり冷めてしまっていると感じる。特にパラスポーツについてはもう少し取り上げてほしい。

○　毎週大河ドラマを楽しみに見ているが、今の大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」は内容がおどろおどろしく、ロシアによるウクライナ侵攻や安倍元首相の銃撃事件など現実の世界でも残酷な事件が続いている中で、見るのがつらいと思うときがある。次の大河ドラマ「どうする家康」が、心が温まるようなドラマであることを期待している。

○　連続テレビ小説「ちむどんどん」は、楽しんでみていたがここ最近は見なくなってしまった。ぜひ最後まで見たくなるような番組を作ってほしい。

○　最近はＳＮＳで評判のよい番組の情報を入手し、「ＮＨＫプラス」を活用しているが、もう少しアプリが使いやすく、見やすくなればよいと思う。また配信期間がもう少し長いと視聴者にとってはうれしいのではないだろうか。

○　コロナ禍を経験して地方志向が強まる中で、課題先進地域と言われている四国では、地域課題を解決するビジネスモデルを構築しようという企業の動きが活発になってきている。来年度は四国での地方創生に向けた動きに期待ができるため、地方創生の後押しになるような番組作りをお願いしたい。また若者たちの郷土愛を醸成し、故郷への回帰を促すような番組もぜひお願いしたい。

　また来年の連続テレビ小説は、前期が牧野富太郎さんをモデルにした「らんまん」で、後期は香川県出身の笠置シヅ子さんをモデルにした「ブギウギ」ということで、かなり四国が話題になると思う。ぜひ盛り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

　若年層へのアプローチに関する点は長年の課題である。若年層向けに作った番組が必ずしもその世代に見てもらえるわけではない。一方で「映像の世紀バタフライエフェクト」は若年層向けの番組ではないが若年層がたくさん見ているというデータがある。今回の改

定では、デジタルシフトの加速や外部プラットフォームの活用に言及している。より多くの人にＮＨＫのコンテンツに触れてもらうという方針だ。若年層が見たくなるようなコンテンツを作るとともに、ＳＮＳ等を活用して届けていくことが必要だと思っている。試行錯誤を重ねていくため、引き続き意見を頂けたらと思う。

＜四国らしんばん「ＨＥＮＲＯ　世界に聞いたその魅力」
（総合　９月２日(金)）について＞

○　海外の視点から遍路の魅力が紹介され四国の輪郭がみえる番組で、四国で暮らす私たちにとって誇れる内容だった。２０を超える国と地域の人へのアンケートやリモート取材を行っていたが、「お遍路を歩いたときは『外国人』ではなくみんなが『お遍路さん』で、そのことばが好きになった」という韓国出身のチェ・サンヒさんのコメントなどから、国籍に関係なく遍路への共通の思いがあることを感じた。コロナ禍で人が集う機会が減る中で、旅行ガイドブック編集者のトーマス・ホールさんの「自然や伝統を感じながら歩く旅行は新型コロナ以降のトレンドです」というコメントは大変心強く感じた。また受け入れ側である私たちにできることについて、最後に触れられていた点がよかった。四国の財産である遍路を、四国に住む我々がさらに知る機会を作ってほしい。

○　四国に住む者として四国を誇りに思える内容だった。外国人それぞれの遍路に対する思いを通して新鮮な気持ちで遍路を見つめ直すことができた。カナダ出身で香川県在住のマーク・グルネウォルドさんの「京都ではお寺が遠くあるように感じるが、四国のお寺はどこも近くで見ることができる」というコメントから大切な四国の魅力を教えられた気がする。松山局の永井伸一アナウンサーが「四国遍路は私たちの宝だと思っていたが、世界中の大切な宝であることが見えてきた」と話していたが、四国に住んでいる私たちはその魅力を国内や海外へ発信することに努め、また自分たちでも実際に巡礼して、四国各県の遍路の特徴を知ったほうがよいと感じた。遍路のために何か役に立つ活動が自分にもできないかと考えさせられるようなすてきな内容だった。

○　世界的なガイドブックの「今年訪れるべき世界の地域」で四国が６位に入ったことから、海外にいる四国遍路経験者からどんな話が聞けるのか期待しながら視聴した。全体的にうまくまとめられていて、テンポがよく時間を感じさせないとてもよい番組だった。５人の外国人がリモートで遍路の体験談を語るシーンでは、それぞれが遍路を経験したことで人生がよい方向に動き出したことが感じられた。トーマスさんが四

国遍路ならではの魅力を紹介するシーンは、具体的に表現されていてとても分かりやすかった。マークさんと永井アナウンサーが実際に善通寺を訪れて、実体験や感じたことを説明するシーンは好感がもてた。今回はポジティブな話ばかりだったが、課題点を含めさまざまな角度から遍路を取り上げる番組もぜひ作ってほしい。

○　遍路に対して感じること、遍路への向き合い方などは国境がないことがよく分かった。遍路の特徴をキーワードを並べて説明し、ガイドブックの話も盛り込んでおり、テンポがよく分かりやすかった。「お接待」する側の四国の人間として自信を持てる話がたくさんあり、人と人が直接つながる遍路文化を大切に守り伝えていきたいと思った。聖地巡礼として、始まりの地に最後戻るという点が四国遍路の特徴である。今後遍路を取り上げる際には、巡礼者の前後の変化を感じることができるという側面も伝えてほしい。外国人向けの情報発信に関する話について、私の知り合いが「『お接待』した外国人のＳＮＳ投稿がきっかけで次から次へと外国人が訪ねて来るようになり、疲弊してしまった」と話していたことがある。今後の番組では、現代の情報発信のあり方という観点も織り込んでほしい。

○　海外の視点から四国遍路の魅力を見ることで、新鮮な気持ちで視聴することができた。四国遍路の体験談の中で出てきた、ソーシャルディスタンスを保ちながら 500 円玉を渡してきたおばあさんの話や、滞在した地域でみこし祭りに誘われたときの話など、遍路文化特有の「お接待」や「おもてなし」といった魅力は、日本人も共感しやすいと思う。またガイドブックで四国が６位に選ばれた理由には納得した。海外は聖地巡礼などの文化が盛んな国もあるため、親しみやすいのだと思う。ただ、海外の人が遍路を利用しやすいように情報提供を行う外国人の取り組みが紹介されていた一方で、受け入れる側の私たちは「特別なことはしなくてよい」とまとめていた点は少し疑問が残った。行政や札所、周辺施設などで外国人を受け入れやすくする工夫があってもよいはずで、あれば紹介してほしいと感じた。

○　過去の松山局の番組で四国をひとくくりにして話していたことに違和感を覚えたことがあるが、今回は四国を結びつける遍路の話題ということで４県の文化の違いに全く触れなかった点はおもしろかった。海外から見れば四国を巡ることそのものが「ＨＥＮＲＯ」であろう。ただ、私たちの日常生活と遍路はほとんど接点がなく、身近で八十八か所を巡ったという人は存在しない。外国人から出てきた遍路の褒めことばや、ガイドブックで四国が６位に選出されたことは実感がわかなかった。最後に「私たちはどう受け入れたらいいのか？」という問いがあったが、まさにこのことが今後の四国にとって大切なことだと気づかされた。遍路という財産をうまく活かすことができていない現状はとてももったいない。２０の国と地域、230 人程度にアンケート、イ

ンタビューを実施したとのことで､その結果を改めてまとめてまた番組にしてほしい。続編を楽しみにしている。

（ＮＨＫ側）

世界的ガイドブックで四国が６位に選出された理由に遍路がある、ということから取材を始め、その過程で世界には遍路が好きな人が多くいることが分かり、リモートインタビューとアンケートを用いて最終的に２０を超える国と地域、230 人程度に接触することができた。海外の視点から遍路を見つめることで新しい発見があると思っていたが、出てきた魅力は私たちが考えるものと同じだった。つまり遍路は「四国の宝」だけでなく､「世界共通の宝」と誇れるのではないかと制作を通して感じた。意見のあった遍路についての情報不足やＳＮＳ発信の問題点、また今後旅行客が増えていく中でさらに浮き彫りになる課題などについては、９月３０日に課題解決について考える番組を放送する予定であり、そこで改めて取り上げたいと思う。

○　スタジオゲスト以外はすべて外国人が語るというのはテーマに合っていて効果的だったように思う。特にマークさんが遍路姿で永井アナウンサーに善通寺を紹介する姿が印象的だった。いかに外国人から遍路が愛されているのか実感したが、翻って受け入れる四国側はどうかと考えると､遍路への関心は一部にとどまっているように思う。番組の最後で触れていたが、地元の人たちがもっと伝統や歴史について学ぶ必要性を感じた。四国遍路を世界遺産に登録するための活動が長らく続いていると思うが、四国４県でも遍路に対する温度差がかなりあると聞いていたこともあり、四国全体で遍路を盛り上げるにはどうすればよいのかを考えさせられる番組だった。冒頭に「遍路の魅力を一言で」というアンケート結果を、英単語で一覧化し視覚的に分かりやすくする試み自体はよかったが、視聴者には高齢者も多いことを考えると、日本語に訳して紹介したほうが伝わりやすいのではないかと思った。

○　コロナ禍で減っていた｢お遍路さん｣が少しずつ戻ってきている実感はあるものの、特集を組んで紹介するのは時期尚早だと思っていた。しかし番組は実際に巡礼の旅に出たいと思えるような内容で､四国県民として非常にうれしく明るい気持ちになった。「お接待」の文化が世界の人たちからも喜んでもらえることを知るとうれしい。今回さまざまな外国人のエピソードを集めていたが、過不足なく伝わるものばかりで見飽きることがなかった。最後に海外からの訪問者の支援活動を行っている人の紹介があったが、外国人の困りごとを知ることはその地域が新たな取り組みを考えるきっかけ

になると思う。ただ、石手寺の「衛門三郎伝説」が紹介されていたが、たく鉢に来た弘法大師を追い返しただけで次々と不幸が訪れ、その行為を後悔し生まれ変わるチャンスを願うというストーリーはあまりに厳しいと思う。この逸話に違和感を覚える外国人はいないのか気になった。

○　四国遍路にこれほど強い情熱を持つ外国人がいることに驚いた。遍路と関わりを持ったきっかけを説明していた点はよかったが、どのぐらいの外国人が遍路に来ているのか具体的な数が知りたかった。四国遍路を行う人は年齢層が高いイメージがあったが、今回は海外の比較的若い方の評価も多くあり固定観念が覆った気がする。韓国の俳優のジン・デヨンさんの話は、自己啓発の視点で紹介されており興味をひかれた。四国遍路を多様な視点で捉えることは、さまざまな人が興味を持つきっかけになると思う。海外で注目されることで若い世代の関心も高まることが予想されるため、さらに若年層に興味を持ってもらえるように地域からも情報発信を行うとよいと感じた。ところで、「衛門三郎伝説」は私も気になり元の伝説を確認したが、やはり弘法大師を追い返した代償はとても大きかったようだ。厳しい話だが、外国人はよい話だと納得するというのは驚きだった。

○　四国遍路に関するアンケートや取材をもとに、四国や四国遍路の魅力を紹介する内容となっていた。一期一会のおもてなしや、地域の伝統、札所での体験や伝承に触れることで、訪れた外国人は人生観が変わるような経験をしたことが分かる。住んでいると身近すぎて意識することが少ないが、文化が異なる外国人にとって、四国にはまた行きたくなる不思議な魅力があるということなのだろう。また「アフターコロナ」を見据えてインターネット上で四国遍路に関する情報発信を行う取り組みがあるものの、まだまだ外国人向けの情報が不足していることが改めて分かった。この課題の解決にあたっては、札所や行政が積極的に動くことが望ましいと思う。今後も四国遍路に対する支援や情報発信に地道に取り組む関係者などを取材し、全国に伝えてほしい。四国遍路のさらなる認知度や魅力の向上につながることを期待する。

○　時流に即応したＮＨＫならでは番組だったと思う。四国遍路の魅力について、２０を超える国と地域の人に行ったアンケートやインタビューの内容がコンパクトにまとめられていた。キーワードをうまく絞り込んだうえで、遍路経験のある外国人が感情をこめて答えているインタビュー映像を多く使用していてとても理解しやすかった。受け入れ側の取り組みとして、徳島大学准教授のモートン常慈さんは「特別なことはしなくてもいい」と言いつつも「重要なのは地元のお寺・名所・歴史に関心を持つこ

と、遍路道を維持すること」を挙げたが、これらは実践が容易でなく最大の課題である。うまくまとめられていたが、さらに識者の意見を聞いたり、受け入れる側の取材を入れたりして掘り下げ、長尺の番組が制作されることを期待したい。また四国向けだけでなく、全国向けや海外向けにもぜひ放送してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

全国放送や海外発信については現在検討中である。アンケート結果を日本語表記にするべきではないかという意見については、翻訳しないほうが回答の本質を表せるのではないかと考えて英語のままにした。また「衛門三郎伝説」の説明については、短くしすぎた部分もありもう少し丁寧に伝えられるとよかったかもしれない。いずれもＱＲコードを利用してネットに誘導し、その中で日本語表記や伝説の詳細を掲載するという、放送とデジタルの連動を行うことで補えた部分があったと思う。ジンさんが「四国遍路が終わったあとには大きな変化があると期待していたが、現実は同じだった。でも臆病な自分が勇気を出して歩いたこと自体が自分の自信につながった」と語っていたのが印象的だった。ジンさんから「大切なことは気づきにある」ということを教えてもらったような気がした。人口減少や高齢化など地方は厳しい時代にあるが、地方にもある豊かさに「気づき」を提供できる番組もこれから制作していきたいと思った。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２２年７月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、２５日（月）、東京第一ホテル松山において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった四国らしんばん「ウクライナから四国へ　私たちにできること」について活発に意見の交換を行った。

最後に、８・９月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	半井　真司	（四国旅客鉄道 取締役会長）
委　員	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜四国らしんばん「ウクライナから四国へ　私たちにできること」
（総合　７月１５日(金)）について＞

○　ウクライナへのロシアの軍事侵攻については、多くの情報が報じられているが、私たちにとっては直接的な関わりが非常に少なくいまだに身近に感じられていない。この番組は、ウクライナ問題を自分ごととして考えるうえで参考になった。四国でのさまざまな支援事例の報告や、専門家とアナウンサーとの掛け合いにより、情報が整理されて伝わってきた。愛媛県西予市野村町でウクライナの相撲選手団を迎え入れた西予市職員の由留部圭祐さんの話では、コミュニケーションの取り方に戸惑いながらも、自身が過去に西日本豪雨で被災した経験をもとに、相手の立場に立って接し方を考えていく温かい姿が紹介されていたと思う。四国でこうした支援の動きが立ち上がって

いることはうれしい。地方での避難民の受け入れは課題も多いと思うため、継続的に報道してほしい。

○　ウクライナの避難民支援について、四国全体の状況を理解しやすく、最新情勢について画面上に長い時間ＱＲコードを表示していたことで、関心を持った視聴者をさらに引き込む工夫がされているように感じた。出演していた認定ＮＰＯ法人難民支援協会の可部州彦さんの解説は非常に分かりやすく、行政と民間、東京と地方の支援について、それぞれ果たせる役割に違いがあることを認識できた。この点は別の分野にも通じると思う。番組のまとめで、避難民の方々を名前で呼び、人として向き合うことが大事であると締めくくられていた。そのような小さな試みも、知らない土地で不安を抱えている避難民の方々に安心感を与えられるかもしれない。解決の難しい問題が数多くあるということを伝えながらも、まずは実際にできそうなことが提示されていた。過去の「四国らしんばん」の放送でも、「地方だからこそできること」について考察していたが、今回もまた新しい視点を得られた。

○　可部さんの解説はよかった。特に、松山局の永井伸一アナウンサーとの質疑応答は的確だった。野村町の職員の由留部さんが、ウクライナの相撲選手団の受け入れにあたり戸惑いながらも体を張って活動するシーンがあったが、支援内容に加えてその後の成果も具体的に知ることができてとてもよかった。避難民に寄り添いながら支援することの大切さを指摘していたが、国が違っても大事な点は共通していることを再認識できた。また、避難民を地方で受け入れる利点の説明には納得した。物価が安く住みやすいということや、自然に触れ合う機会もあり、気持ちを和らげるという効果もあると思う。ただ、「避難民」と「難民」とでは何が違うのか気になった。この違いを学ぶことは、難民問題をさらに深く考えるきっかけになると思う。学校教育にも適した番組であると感じたため、番組のホームページに、学びのポイントや問いかけなどを掲載するのはどうか。

○　ロシアのウクライナ侵攻からまもなく５か月がたつが、長期化することで少し関心が薄れているような気がする。戦争自体決してひと事ではなく、物価高など私たちの生活につながっている。平和のあり方を考えるうえでも、メディアが伝えることは大切だと思う。番組冒頭で、日本に来ている避難民の人数を取り上げていたが、四国には１１人しかいないということに驚いた。後半で、今後地方での受け入れが加速していくというコメントがあったが、由留部さんの活動や、徳島県と高知県の支援事例はヒントになる。可部さんの「誰しも難民支援のプロではない」「人として向き合って接していく」というアドバイスは心に響いた。ウクライナの避難民は国際的にも注目されていて、日本も受け入れを積極的に進めてはいるが、「難民鎖国」という現状もある。

今後は、ウクライナ支援をきっかけに難民認定や世界の難民問題に対して日本がどう向き合うべきか取り上げてほしい。

○　愛媛県や高知県の支援事例を見て、まずは私たちがウクライナ問題の実情を認識し、当事者意識を持つことの重要性を強く感じた。そのうえで、行政支援とは別に私たちに何ができるのか、一人一人が考えていく必要がある。避難した人としっかり向き合うことの大切さに触れていたが、ウクライナから避難した人々が日本、四国に住んでいても孤立することなく、安心感や充実感をもって生活できるような環境を整備することは極めて重要であると考えさせられる番組だった。なお、ウクライナの隣国であるポーランドの首都ワルシャワは数多くの避難民を受け入れているが、欧州と比較するとまだまだ日本は難民受け入れの余地が大きいと思われる。日本は難民認定基準が厳格であるともいわれているが、そのあたりの課題にも一歩踏み込んだ番組構成にしてもよかったと思う。

○　野村町のウクライナの相撲選手団のシーンでは、由留部さんとウクライナの選手が目と目を合わせ、スマートフォンを通じて意思疎通を図る場面がとても印象的だった。西日本豪雨でのつらい体験から選手団を優しく支え、全力でぶつかり合うことでことばを超えて打ち解ける様子が伝わったうえ、「自分ができることをやれる範囲でやってあげる気持ちが大事だと思う」ということばには説得力があった。高知県の事例からは、民間組織による相手の立場に立った細かいサポートの詳細がよく分かった。また、難民支援協会の可部さんのコメントは的確で納得感があった。ただ、可部さんの表情の写し方については、カメラのアングルを変えるなど工夫の余地があると感じた。

（ＮＨＫ側）

番組制作のきっかけは、野村町に相撲の強豪国であるウクライナの選手団が来るという情報だった。取材を始めると四国にいるウクライナの避難民の人数が１１人と分かり、受け入れの実情を探った。遠い国で起きている戦争をどのように自分ごととして捉えてもらうかを主題として、四国での具体的な支援事例を、スタジオの可部さんのメッセージ性あるコメントとともに紹介した。指摘のあった点だが、日本はウクライナの人々を「避難民」という形で受け入れている。「難民」の定義は難民条約で規定されており、日本は条約を厳密に守るよう厳しい認定基準を設けているため、受け入れ人数が非常に少ない。ウクライナ問題は、この先の日本の難民対応に影響を及ぼすことが予想されるため、今後も継続的に取材していきたい。また、この番組はデジタル発信にも力を入れている。教育的な視点

からホームページをさらに充実させることも検討したい。

○　番組のテーマがフィクションや過去の戦争の話ではなく現実に起きている出来事であり、見ると心が痛くなるものかと思っていたが、人と人とのつながりに焦点をあてたさわやかな内容で負担なく視聴できた。前半で取り上げた野村町は西日本豪雨で大きな被害があった地域である。過去のつらい経験からウクライナの選手たちにどう対応すればよいか分からず、気まずい雰囲気になっていたが、スマートフォンの翻訳機能を使った会話や全力の練習を通してしだいに心を通わせていく様子が感じ取れた。後半には、ことばの壁などで日本での生活に苦しむ避難民を支える民間団体の紹介があった。「高知ウクライナ友の会」の発足人であるコスチャンチンさんだけでなく、メンバー内で話し合い最適な支援をコーディネートしていく取り組みは、今後地方での支援体制を強化するために参考になるだろう。ＱＲコードで最新情報へ案内していたこともよかった。

○　ウクライナ問題で実感していることといえば、燃料や食料の高騰が中心だ。番組のタイトルをみて、難民を受け入れた経験のない一般市民がこの問題に関われるのか、四国に独自性があるのかイメージしづらかったが、番組を見ると意義を見いだせた。「顔が見える関係」という地域ならではの支援の魅力に関する可部さんの解説は、納得のいく内容だった。「高知ウクライナ友の会」は、行政と民間が一体となって活動していることで、それぞれの役割を発揮できているということも伝えられたらよかった。現在、技能研修生など地域で暮らす外国人が増加している。多文化共生社会を築くうえで、避難民の受け入れというのは身近なテーマであり、番組の最後の「まずは名前で声がけする」というのは具体性があってよかった。今回の番組はウクライナの方々が四国に来てからの話だったが、日本に来た経緯を知りたかった。

○　戦争が長期化し関心が少し薄まるなか、よいタイミングの放送だったと思う。永井アナウンサーと可部さんの柔らかい語り口調はとても分かりやすかった。ウクライナの相撲選手団の話では、選手たちの表情や心境、由留部さんの精一杯な様子が映像によく表れており、選手団のコメントも印象的でよかった。ウクライナ東部のドネツク州から徳島県にきた夫婦の話では、個々のケースに対する行政の支援に限界を感じつつも、その支援の内容をもう少し説明してほしいと思った。一方、高知県の事例では、地方の難民支援の利点がうまく説明されていたと思う。避難民の方々は、戦争が身近に起きている中で大変な思いをしてきたはずで、一人一人のことを考えてサポートすることの大切さが述べられておりよい番組だと感じた。ただ、四国にどのような経緯で来たのか、文化の異なる遠い国に来ることがどのようなものなのかをもっと描いてほしかった。

○　避難民の支援に取り組む人たちや専門家の人選がよく、取材も丁寧で、非常に理解しやすかった。ＱＲコードをうまく使って、最新情勢や相撲の世界大会の結果を紹介していたと思う。野村町の事例はストーリーとしてはできすぎだったが、由留部さんのことばに非常に説得力があった。避難民への支援について、徳島県の事例では、課題を明確にしたうえで行政側の支援体制や対応の限界をうまく映し出していた。一方、高知県の「ウクライナ友の会」の事例では、きめ細やかな支援を行う民間団体の紹介、そしてその必要性を訴えておりうまい構成になっていた。番組を見て、生活基盤を失ったときに自分が何を希望に生きるのか考えさせられた。国際秩序の変容や南海トラフ巨大地震の脅威もある中で、ひと事と思わず難民支援に協力することが必要と感じた。視聴者に対して身近な問題として今できることを考えてもらおうという意図は十分に伝わったと思う。

また、６月２４日(金)、７月１日(金)の「前園真聖　四国ともたび」を見た。サッカー元日本代表の前園真聖さんが出演してきたこれまでのシリーズ「自転車へんろ旅」「しこく絶景たび」はどれもおもしろく、第３弾ということで楽しみにしていた。企画はよかったが、ゲストでお笑い芸人のじゅんいちダビッドソンさんの特徴が前園さんと似ているように見えたため、次回のゲストは前園さんと違った個性を持つゲストがよいと思う。

○　ウクライナで起きていることをどう受け止めてよいのか分からない、できることがあるならば自分もしたいが、どうしたらよいのか分からない、そんな思いを持っている人たちに、自分に何ができるのかを考えてもらうヒントを与える番組だった。辛いときに自分だったらどうしてほしいか、とてもシンプルなことだが考えすぎると実行することは難しくなる。何か特別なことをしようと気負わず、自分なりの支援のしかたを見いだしている由留部さんの姿を通して、視聴者は自分ごととして見ることができたと思う。ウクライナ問題のさまざまな事柄を盛り込み過ぎず、落ち着いて考えながら見ることができる構成になっていてよかった。ただ、番組の最後が少し駆け足になったように感じたため、言いたいことが伝えきれたのか気になった。また、四国に避難された方たちが四国を選んだきっかけも知りたかった。

（ＮＨＫ側）

１１人がどのようにして四国にやってきたかについて、事情はさまざまだが、四国で受け入れる拠点があることを大使館や人づてで知って来る方が多いことが分かっている。取材を申し込む中で、思うように進まないこともあった。センシティブな内容を掘り下げて

いく中で取材拒否にあうこともあったが、謙虚な姿勢でウクライナの方々と接することで、心を開いて取材をさせてもらうことができた場面もあり私たちにとって大きな学びになった。２５分の番組で紹介できない情報をホームページに掲載し、ＱＲコードで誘導を試みたが、指摘のあった行政と民間の支援内容についてもそれぞれ補足するべきだったと思う。多角的な展開を通じて今後もたくさんの視聴者に見ていただけるよう努力をしながら、公共メディアの使命を果たしていきたい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２２年６月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、２０日（月）、東京第一ホテル松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、事前に視聴してもらった四国４局金曜夜７時台の県域番組を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、７月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	半井　真司	（四国旅客鉄道 代表取締役会長）
副委員長	三好　賢治	（伊予銀行 代表取締役頭取）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	金行　亜弥	（愛媛新聞社　論説委員室委員）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究センター長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜あわとく「目一杯生きろ～野田知佑のメッセージ～」
（総合　６月１７日(金)）について＞

○　カヌーイストの野田知佑さんが今年３月に亡くなったが、番組では野田さんが私たちに残してくれたことを２５分にまとめていた。野田さんのことばは、生きる力を育むことが大切だと言われる今の教育に重なる。自然を遠ざけるのではなく、楽しむことや共存することの大切さを広め、川と人との関係性を変えた。野田さんの哲学は、次世代にしっかりと受け継がれている。短い時間で冒険家・文学者・教育家であった野田さんの一端を知ることができ、改めて野田さんの功績に気づかされた。野田さん

が世界でも有数とたたえる徳島の川に、私たちはもっと自信や誇りをもち、大切にしていかないといけないと思った。この番組の制作を記念して、野田さんや四国の川と人とのかかわりを紹介するパネル展を四国４県のＮＨＫで巡回してはどうか。

○　冒頭に「自分は自分」「自分の意志を貫く強さ」など、納得させられるキーワードがいくつもあり、大変興味を持って見ていたが、全体を通して番組の視点に違和感があった。まず、野田さんが校長をつとめた「川の学校」のシーンで「何をやってもいい」という話があったが、川の危険性や安全な遊び方の説明がなかったことに怖さを感じた。また、野田さんが放浪の旅の充実感や、会社勤めの気楽さを語っていたが、好きなことだけで生きる人はごく少数で、社会で頑張る人たちの生き方を否定しているようにも感じ取れてしまう。野田さんを紹介する番組であり、その自由な生き方に憧れをもって制作された番組だとは思うが、自由の怖さの話もあればよかった。また、吉野川第十堰の国の改築計画の話題では、反対派だけでなく賛成派の視点も取り上げるべきだったと思う。そういった違和感もあり、見終わったあとに複雑な気持ちになってしまった。

（ＮＨＫ側）

この番組の企画は、徳島局の職員に「川の学校」の卒業生がおり、亡くなられた野田さんの生き方を紹介する番組を作りたいということで立ち上がった。「川の学校」は、子どもたちに川を知り、遊ぶ楽しさを味わってもらうために設立された。取材をしていくと、野田さんが学校に参加した子どもたちと継続して交流していることが分かった。その中で、進路を自分で選ぶことの大切さを伝えているという部分が共通していると感じ、「目一杯生きる」というテーマで番組を制作した。指摘のあった自由の怖さという視点も取り入れた方がよかったかもしれない。また、「川の学校」の授業中の「何をやってもいい」というシーンは説明不足だった点があり、実際には数多くのスタッフが危険のないようサポートをしている。いただいた意見を大切にして今後に活かしていきたい。

＜とさ金「旬魚探海～春の宿毛を釣りつくす！～」

（総合　５月２０日(金)）について＞

○　高知県にこんなにも豊かな海があるのかと思い非常に驚いた。世代を超えた４人の大人が宿毛湾で釣りをする光景や、それぞれのコメントがほのぼのとしており、魚や釣りへの愛情も感じた。「釣れる釣り番組はリアリティーがないよ」というコメントは

納得で、実際は釣れずに帰ることも多い。この番組では、釣っている場面とそうではないときのトーク場面のバランスや、進行のテンポもちょうどよかった。魚の種類や釣り方などの紹介はあったが、釣り番組というよりは釣りをテーマにして高知のゆたかさを発信している番組で、「とさ金」で放送する内容としてふさわしいと感じた。高知県は海の印象が強いが、約８割を森林が占めているので山をテーマにした番組にも今後期待したい。

○　私自身釣りの経験があったため、番組を通して何が釣れるのかを純粋に楽しみながら見ることができた。釣り人の４人が２日間で計１２種類もの魚を釣り上げており、宿毛湾の魚種の豊かさを感じた。釣りが終了した後に、宿毛にあるイタリアン料理店でプロの料理人に釣った魚を調理してもらっていたが、ふだんからこういったサービスをしているのかどうかは視聴者的には気になるところかもしれない。完成していく料理をすぐに食べずに、料理のアップや料理人の手さばきを写していたシーンがあったが、できたての料理が冷めていくというのはもったいない。見るからにおいしそうな料理だったため、つぎつぎと食べていくという構成にすればよかったと感じた。

（ＮＨＫ側）

この番組は、高知局の番組「こうちいちばん」の中で、今年３月まで１年半にわたり放送した企画がきっかけで生まれた。高知局に着任し、釣りの魅力に目覚めた高知局の長野亮アナウンサーがこのコーナーを立ち上げたのだが、コーナーにとどまらず１つの番組にすることを検討し実現した。番組の大きな構成要素は、「釣り」「釣りをしながらのトーク」「料理」の３つである。そのうちの「料理」について、もともとは釣り人自身が行っていたが、この番組ではコンセプトを変え、地元の腕利きの料理人にお店の中で料理してもらうことにした。その中では、新型コロナウイルス対策や、公共放送としてお店の宣伝にならないような配慮を徹底した。釣りのロケは天候に左右されやすく、スケジュールでの苦労もあったが遊び心を忘れずに制作することを心がけた。

＜ひめＤＯＮ！「花まで、歩みつづけて」（総合　５月２０日(金)）について＞

○　ハンセン病患者として生きた歌人の政石蒙さんについての番組だったが、随筆「花までの距離」に記された内容と、ハンセン病患者を取り巻く当時の環境、関係者への取材や、残っている手紙などをうまくつなげて作られていた。「花までの距離」が、政石さんの故郷との心の距離であるという解説は、当時の患者の心理をよく表していて

切なくなった。また、ハンセン病が完治しても故郷では暮らせないと話した政石さんの心境を考えると辛くなった。当時の社会の差別意識がハンセン病患者にとって生きにくいものだったということが、番組を通して伝わってきた。気になった点としては、冒頭の構成である。ハンセン病関連の話であることは冒頭から伝わってきたものの、今回の主役である政石さんの名前が紹介されるまでに２分程度かかっていたので、もう少し短くてもよかったのではないか。

○　ハンセン病の差別の歴史は、コロナ禍の今だからこそ共感できる部分もあり、改めて見つめなおすことができた。番組全体を通して、松山局の小野文明アナウンサーによる詩の朗読が丁寧で、当時を鮮明に想像させる演出方法も効果的だった。また、取材した方々のコメントはどれも心に響く内容だった。病の辛い面だけでなく、詩の作品としての味わいも番組から伝わってきて、一見重いテーマもアートを通すことで伝わりやすいものになると感じた。一方、瀬戸内国際芸術祭で政石さんをテーマに作品を発表した芸術家の山川冬樹さんのインタビューがあったが、より適切な撮影場所があったのではないか。また芸術祭でハンセン病を伝える試みがあることが分かった一方で、番組の放送日が春会期の終了直後だったことがもったいないと感じた。

○　ハンセン病のさまざまな要素が２５分間でよくまとまっていると感じた。政石さんがソ連軍の捕虜となり、連れて行かれたモンゴルの抑留地の隔離小屋の立て札に「コノ線ヨリ許可ナク入ルベカラズ　コノ線ヨリ絶対ニ出ルベカラズ」ということばが書かれていたことが紹介されていたが、この「線」というのがハンセン病患者の置かれた状況と重なり胸に迫った。手に入れたはずの花は、なぜ輝きを失ってしまったのかという番組の問いも、そこに原点があるような気がした。なお、政石さんのペンネームについて、モンゴルから「蒙」という字をとったと考えられるので、その点にも少し触れてよかったのではないかと思った。また、インタビューに答えていた山川さんの作品は映像でも紹介してほしかった。

○　モンゴルで抑留されたときに政石さんが詠んだ詩の内容や、歌人の土田和子さんが政石さんについて述べる時のことばや、政石さんが少年の頃に出会い結婚の約束を交わしていた渡辺美紗子さんの文面など、感動するシーンがいくつもあった。東京アナウンス室の中條誠子アナウンサーの語りもよく、とてもうまく仕上げていると感じた。よい番組だったが、最初から見てもらえなかったり、途中でチャンネルを変えられてしまったりするともったいない。印象的な場面から入るなど、出だしの部分で何かつかみがあればよいと感じた。また、渡辺さんとの文通の内容に興味があったので、もっと紹介してほしいと思った。

○　今回は、通常のルポルタージュや人物紹介にとどまらず、政石さんの短歌や随筆、歌が詠まれた背景や史実をうまく組み合わせて紹介していると感じた。加えてナレーションも非常にわかりやすく、全体を通じて強く記憶に残る番組だったという印象だ。特に、壮絶な人生の中で短歌や随筆の世界に出会ったということで、歌が生きる糧となっていた分、政石さんが残した作品には強い思いが込められていることがひしひしと伝わった。作品と史実をうまく構成することによって、視聴者自身に強く訴えかける内容になっていた。正直なところ、政石さんのことはよく知らなかったため勉強になった。今後も積極的に地元出身者を取り上げていってほしい。

（ＮＨＫ側）

いろいろ指摘はあったが、番組を通して描きたかったことを伝えられたのではないかと感じている。元ハンセン病患者の政石蒙という歌人の人生を通してハンセン病の問題点も描くというのがこの番組の趣旨で、故人のため生前を知る関係者の証言をもとに番組を構成していった。ハンセン病の差別の歴史は、今のコロナ禍において決してひと事ではないというのも番組に込めたメッセージの一つ。このように時代を超えて根底でつながっている問題は多いのではないかと感じる。引き続き、こうした視点を大切に制作にあたっていきたい。

＜さぬきドキっ！「＃私が働く理由」（総合　５月２０日(金)）について＞

○　冒頭すぐに、今回の番組の主人公である高松局ディレクターの伊藤七海さんという入局２年目の女性が登場したため、どんな番組なのかと期待感をもって視聴した。さまざまな分野で活躍する３人を取り上げて、今悩みを抱えている若い世代にむけてメッセージを発信する番組で、前向きな意見が多く、目標をしっかりともって日々取り組んでいることが伝わってきた。３人はどなたも起業家だったが、普通のサラリーマンにも話を聞いてみてほしかった。また、伊藤さん自身の気持ちももう少し聞きたいと思った。若い世代に見てもらいたい内容なのだろうが、金曜日の午後７時３０分に放送しても時間的にあまり若者は見ないのではないかと思う。伝えるべき人にどう発信していくか検討していってほしい。

○　目の前の仕事を頑張ってきたものの、働く意味を見失いつつある若手ディレクターが、現在活躍する若者たちの意見を聞いて回り、同じ悩みを持つ同世代の参考になるように意図した番組だったと感じた。誰もが納得できる答えを導き出せないテーマの中、伊藤さんの率直な質問を真っ向から受け止めて、一生懸命に答えていた相談相手

の人選について、すばらしかったと思っている。番組を通して３人の生活信条や生き方がよく伝わってきた。一方で３人だけでなく、悩みを持つ若者たちと、活躍している若者たちをスタジオに集めてディスカッション形式で展開するほうが、さまざまな意見が聞けて参考になるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

番組制作にあたっては、単なる１人の若者の自分ドキュメンタリーにならないように特に注意を払った。なるべくテーマを一般化させるために街頭インタビューを多用し、指摘のあった伊藤ディレクター自身の気持ちの表現は意図的に抑えたところがある。この番組は５月２０(金)の放送後、反響もあり６月１１日(土)の深夜にＢＳ１で放送し、放送後には若者から「心に刺さった」という感想が寄せられている。相談相手の人選は、取材の経緯により結果的に３人とも経営者になったが、経営者として語ることばには力強さがあったと思う。また提案いただいたとおり、ディスカッション形式にすると本音がたくさん聞けてよいかもしれない。いただいた貴重な意見は、今後の番組制作での検討テーマとしたい。

＜放送番組一般について＞

○　５月２５日(水)の離島で発見！ラストファミリー「瀬戸内・不思議絶景と歴史の島」を見た。香川県の志々島では、花農家をやめた後も花を植え続ける女性が作る「天空の花畑」や、小さな家の形をしたお墓などが紹介されており、不思議な風景にスポットを当て、興味を引く内容だった。愛媛県の鵜島に住む福羅家と織田家という２つの一族の紹介では、村上海賊や織田信長とのゆかりなど歴史的な背景をしっかり取材していてとてもおもしろかった。沖縄県出身で芸人のゴリさんと、長崎県五島列島出身で俳優の長濱ねるさんは、それぞれの島の話を盛り込みながら進行しており適役だった。登場する島の人たちそれぞれにドラマがあり、またそれが島の歴史とも相まって、とても中身の濃い番組だった。地方の過疎や地域活性化について考えるきっかけにもなると思う。今後もこのような視点で、さまざまな島を紹介してほしい。

また、５月２７日(金)のノルノルミシル！「愛媛・南予 バスの旅」(後編) を見た。県内の人でも知らないような場所が紹介されていておもしろかった。「〇〇で育てたタイを探せ」というミッションは、地元の人には「ミカンで育てた」と知られていることだったが、タレントのユージさんが、「湖」や「お風呂」など思いもよらない答えを言っていることがとても新鮮でおもしろかった。番組を見て、同じようにバスの旅を

したいと思ったが、ユージさん自身も時間切れで最後のスポットには行けなかったという点もあり、地方でのバスを利用した移動の難しさを感じた。行き方のガイドや、効率的に回れる方法について情報があればよかった。

○　同じく、５月２７日(金)の「ノルノルミシル！」を見た。ユージさんのキャラクターがよく、番組としてはおもしろいが、バスの待ち時間の長さが気になり、バスを利用した旅のおもしろさよりも不便さが際立ってしまったのではないか。時間の都合上、最後の目的地にはたどり着けなかったということもあり、カードを引いて目的地を決めるという方法は、地方の公共交通では厳しい面もあるかと思う。利用方法を含め、公共交通を利用した旅のおもしろさをもっと分かりやすく示してほしい。

○　同じく、５月２７日(金)の「ノルノルミシル！」を見た。前編はゆったりした雰囲気だったが、今回は目的地までの距離も長く、時間に追われている印象が強かった。「春らんまん！バスとの絶景写真を撮れ」というミッションでは、肝心の芝桜が咲いておらず、大変な道のりの結果としては残念だった。災害を乗り越え、絶景を取り戻そうという取り組みはすばらしいことだと思う。番組では「春らんまん」や「絶景」というキーワードを掲げていたが、取り組みに焦点を当てたミッション名のほうがよいと感じた。また、時間切れで行けなかった旧船戸川橋のほうが、インパクトがあり興味をそそられたため、カードを引いて順番を決めるのではなく、効率よく回れるように行き先を決めるのがよいのではないか。

○　５月２７日(金)の「ゆう６かがわ防災スペシャル～地域を知り　命を守る～」を見た。梅雨や台風シーズンを前に、よい時期の放送だったと思う。讃岐山脈から瀬戸内海に流れる県内の川は全国有数の急流で、災害も少なからず起きていることを紹介していた。さまざまな図解や地図などを通して工夫を凝らして紹介されていたが、災害時に個人がどのような対応をすればよいのかという説明もほしかった。災害が起こる理由は紹介されていても、その災害が起きたあと、住民それぞれがどのような意識で動いたらよいのかという点が不足していたと思う。実際にどう行動したらよいか分からないまま番組が終わってしまったような印象を受けた。また、このような防災番組は淡々とした雰囲気になりがちなため、もう少し明るさもあったらよいと思った。

○　５月２８日(土)の「ギュッと！四国」を見た。いずれの出演者も明るく力強く、これから始まる１日をあと押ししてくれるようで休日の朝にふさわしい番組だと改めて思った。今後さらに、松山局の宮本真智アナウンサーやキャスターの皆さんが成長していく姿を見るのも楽しみの一つだ。

○　６月３日(金)の四国らしんばん「守れるか“地域の足”～四国 公共交通の未来は～」を見た。少子高齢化やコロナ禍で、四国の公共交通はかつてない危機に直面しており、このような状況の中で、公共交通を立て直す新たな取り組みが紹介されていた。徳島、高知、愛媛の取り組みが紹介されており、どれも大変興味深かったが、改めて地域ごとに事情が異なることも痛感した。課題をすべて解決することは難しいとしても、改善する方法は見つかるという期待感を持つことができ、地域の公共交通に対しての関心を高めてくれた番組で大変よかった。

○　同じく、６月３日(金)の「四国らしんばん」を見た。公共交通は今、人口の減少に加えて、コロナ禍により存亡の危機にある。その地域の足をどのように守るのか、それは事業者や行政だけの問題ではなく、住民も一緒に考える必要性があると問題提起した番組だった。３つの新しい取り組みを紹介していたが、名古屋大学の加藤博和教授の分かりやすい解説に加え、愛媛在住の高校生で俳優の宮下咲さんの利用者目線でのコメント、そして松山局の永井伸一アナウンサーの現地レポート、ジオラマを活用した説明など、公共交通の問題を身近なものとしてとらえられるように工夫をしていた点がすばらしかった。今後の四国の将来を左右する問題のため、今後もさまざまな切り口からこのような番組を制作してほしい。

○　６月３日(金)の東北ココから「消滅集落に暮らす」をＮＨＫプラスで見た。秋田県の白神山麓の里山で、自給自足に近い暮らしを送る家族を紹介していた。子育ての葛藤を抱えながら、知人などの紹介を得てアルバイトもしつつ、経済とのバランスを考えて生活を営んでいる点で興味深かった。手作業で米作りをしていても今後の経済的な自立は難しいと思う。これから社会との関係性をどう築いていくのか、今後が気になる内容だった。

○　６月１２日(日)の愛媛防災シンポジウム「考えよう 女性と防災」（総合 後 1:05～1:48 愛媛県域）を見た。会場参加型のクイズ形式となっており、今まで視聴した防災関連の番組と比べてひきつけられたうえ、クイズを通じて今後に活かせる学びを得ることができた。「避難時も眉毛だけはかけるように化粧品を備える」など女性ならではの視点が満載で、防災についてより具体的に共感できるような内容だった。

○　６月１３日(月)の「ひめポン！」を見た。この日、四国地方の梅雨入りが発表されたが、昨年秋以降の降雨量が少ないため、今年の夏は、渇水が心配されるのではないかと気になっている。気象情報は多くの視聴者にとって非常に大切なものであるため、引き続き丁寧に伝えてほしい。また、ＪＲ松山駅西口の新デザインに関する話題もとても興味深かった。デザイン案をもとに、説明会の参加者からさまざまな意見があが

っていたが、松山の玄関口として、自慢できるような駅に生まれ変わることを期待している。松山駅に関する新たな情報は市民の関心も高いため、引き続き取り上げてほしい。

○　６月１５日(水)のザ・バックヤード　知の迷宮の裏側探訪「大塚国際美術館　レプリカで楽しむ世界の名画」を見た。世界の名画の実寸大レプリカが一同に展示されている大塚国際美術館のバックヤードが紹介されていた。番組では、陶板の絵画がなぜ長年にわたって退色、劣化しないのかという点や、絵画の裏に隠された秘密などが紹介されていた。コロナ禍もあり、海外旅行に気軽に行くことが難しい状況だが、名画を通して世界を感じることができる番組だった。

○　６月１７日(金)のひめＤＯＮ！「造船のまち　巡って発見！」を見た。事前の情報から造船の話が中心かと思っていたが、造船を中心にまちのいろいろなことを発見するというクイズ形式の番組だった。松山局の小野アナウンサーが出すクイズを通して、今治港開港 100 周年の話題から、造船会社の船造り、船の部品工場、名物の焼き鳥まで今治を広く見ることができた。今治市といえば、造船業が比較的注目されやすいが、やはり外航海運の船主業があるからこそ、造船がこれだけ根づいている。その点もおもしろい取材のテーマになるのではないか。

○　同じく、６月１７日(金)の「ひめＤＯＮ！」を見た。造船という共通の切り口から、食文化や学生まで紹介しており、今治市民の生活の中でどのように造船が根づいているのかよく分かった。ゲストでガールズバンドたけやま３．５のメンバー武田雛歩さんは、分からないことばについてよく質問をしていて、とても好印象だった。クイズの選択肢の中には、少しイメージしづらいキーワードもあり、ひと言説明があってもよいのではないかと思った。

○　同じく６月１７日(金)の「ひめＤＯＮ！」を見た。今治市が日本一の造船の町であると知ってはいたが、詳しい歴史は知らなかったため勉強になった。クイズ形式で、視聴者も考えながら最後まで楽しく見られる点もよかった。全体を通して楽しく見ることができたが、想像以上に終始造船関連の話題だったため、タイトルの「巡って発見！」という要素が少ないように感じた。

○　「あわんと！ＢＯＳＡＩ」というミニ番組は、徳島県内のさまざまな地域に住んでいる人の防災への取り組みや課題を紹介しており、自分の地域はどうだろうかと改めて考え直すきっかけになるよい番組だと思う。行政の大きな枠組みではなく、町の人たちができる小さな取り組みが紹介されるため、視聴者が「自分にもできそうだ」と

防災に対する意識を自然に持つことができる。放送時間が３分と短いため、気軽に見ることができるほか、番組に登場する方々も気負わずに出演できる点も魅力だと思う。

○　松山局のＳＮＳの投稿は、画像や絵文字が工夫されていて投稿内容にユーモアがある。番組の情報を告知するタイミングも適切で、とても役に立っている。ＳＮＳの投稿から気軽にさまざまな話題にアクセスできて便利だ。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２２年５月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１６日(月)、いよてつ髙島屋において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０２１年度四国地方放送番組の種別ごとの放送時間」について報告があった。続いて、事前に視聴してもらった「ギュッと！四国」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、６月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	半井　真司	（四国旅客鉄道代表取締役会長）
副委員長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
委　　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）

（主な発言）

＜「ギュッと！四国」（総合　４月３０日(土)放送）について＞

○　「ギュッと！気にナル」のコーナーでは「考えよう　女性×防災」をテーマにしていた。香川県坂出市が防災に積極的に取り組んでいる自治体だと知ってはいたが、ここまで力を入れていたとは驚いた。市の女性職員で構成している「さかいで１３１（ぼうさい）おとめ隊」は、メンバーを定期的に入れ替え、多くの職員が活動を経験する仕組みとなっている点がすばらしいと思った。おとめ隊の呼びかけにより、職員が防災グッズをまとめたポーチを持ち歩くなど、どのように実践されているかも伝えられていてよかった。また、災害時のトイレの問題について、これまで放送で取り上げら

れる機会が少なかった凝固剤の実験を紹介しており、多くの人に見てほしい内容だった。今回のコーナーを再編集するなどしてホームページに掲載してほしい。引き続き、学びの多い内容を期待している。

○　今回の「ギュッと！気にナル」のコーナーでは、防災士の木藤容子さんが紹介していた段ボールトイレが印象的だった。段ボールトイレに装飾をこらすことで、実際に使うときに気分が落ち込まないようにしたり、ふだんからリビングに置いて有事に備えたりすることができるという視点は、女性ならではのアイデアだと思った。「ギュッと！であい旅」で訪れていた高知県津野町の四万十川は、もともと手つかずの自然が残されていると思っていたが、道路拡張にともなう工事を行った後に復元されたと初めて知った。四万十川の自然を後世に残そうとした地域の人々の思いがすばらしく、よく伝わる内容だった。ゲストでテノール歌手の秋川雅史さんはコメントも適切だったほか、愛媛県出身ならではの郷土愛も感じられてよかった。

○　冒頭は明るい軽快なあいさつと音楽で始まったが、その後のニュースへの入り方がやや唐突に感じられ、気持ちの切り替えが難しかった。「ギュッと！気にナル」のコーナーは、初めて知る取り組みが紹介されており学びが多かった。中でも、いままで防災グッズを自分自身で作るという発想が無かったため、段ボールトイレの製作には驚いたとともに、改めて防災に対する意識の低さを痛感した。「ギュッと！であい旅」は、四万十川流域の自然や文化を守ろうと活動する人を紹介しており、分かりやすくまとまっていた。ゲストの秋川さんのコメントも頼もしく感じられよかった。全体を通して朝から元気をもらえる内容で、視聴後はさわやかな気分になった。今後も期待している。

○　坂出市役所の「さかいで１３１おとめ隊」は若い女性職員も多く、このように幅広い世代が率先して活動している様子を紹介することにより、若い視聴者の防災への意識を高められるのではないかと思った。西条市の防災教室では、段ボールトイレを楽しんで作っている様子が印象に残った。また、排泄物を固める凝固剤を使ったアロマづくりは斬新で驚いた。防災を深く学ぶ機会も大切だが、深刻になりすぎず、気軽に触れる機会を増やすことも重要だと考えさせられた。「ギュッと！であい旅」は、四万十川の現在の環境が守られるまでにどのような歴史があり、改善されてきたのか初めて知ることができた。落差工と呼ばれる川の段差が、どのような意図で作られ、生態系に影響を与えるのかを図で説明していた点も分かりやすかった。いずれのコーナーも希望のある内容で、気持ちよく視聴することができた。

○　番組の冒頭で、ゲストの秋川さんが地元の祭りに参加していた様子が紹介され、ふ

だんとは違う一面を見ることができ親近感がわいた。松山局の宮本真智アナウンサーや田中勇作気象予報士は、さわやかで好印象だった。坂出市役所の「さかいで１３１おとめ隊」の話題では、女性ならではの視点でオリジナルの防災グッズをまとめたポーチや、避難所設営マニュアルを考えたことが紹介されていて、視聴者の防災に関する意識を高めることができたのではないか。防災士の木藤さんが紹介していた、凝固剤で作ったアロマも、防災を身近に感じられる新しいアイデアだった。今後も、高齢者や障害者などさまざまな立場から防災を取り上げてほしい。「ギュッと！であい旅」は、川漁師の豊田庄二さんや、元町役場職員の熊田光男さんの説明や図解がとても丁寧で分かりやすかった。ただ、豊田さんが釣ったアマゴを見せる場面では、「赤い点があるのが特徴」と説明していたものの、画面上ではよく見えず残念だった。

（ＮＨＫ側）

「ギュッと!四国」は２０２０年４月に立ち上げ、放送３年目となった。今年度からキャスターが入れ替わるのに合わせ、スタジオセットと番組ロゴ、音楽も新たにリニューアルした。また、気象予報士が出演し、より詳しく気象情報を伝えるよう改善した。新キャスターの宮本アナウンサーは入局４年目と若手だが意欲的に取り組んでいる。今後も見守ってほしい。番組の終盤、週末のお出かけ情報を伝える「ハッとホッとナビ」のコーナーは、コロナ禍という状況を鑑みて現在は番組の宣伝にしているが、今後感染状況を見ながら、充実させていきたい。各コーナーは、四国４局が順番に担当をしている。引き続き偏りがないようバランスを見極め、四国４県の視聴者に楽しんでもらえるようにしたい。

○　最初にニュースを伝えたあと、四国らしさのある話題を特集するという構成はよいと思う。坂出市役所の「さかいで１３１おとめ隊」の活動は、ホームページが中心のように見えたが、どこまで住民に周知されているのか気になった。また、職員が隊員を経験することで、市役所内での防災意識を高めることが第１の目的になっているのではないかと疑問に感じた。西条市の防災士・木藤さんの活動は驚きが多かった。防災を日常に取り入れる工夫が分かりやすかった。「ギュッと！であい旅」は、四万十川流域の美しい自然と共生するまでの努力の過程がまとめられていてよかった。その道のりが前段に紹介されていたからこそ、最後に映った小さな源流の映像も感慨深いものとなっていた。

○　冒頭のニュースで、愛媛県の温室効果ガスの排出量が減少したと取り上げていたが、四国４県向けの番組であることを踏まえ、ほか３県のデータも合わせて紹介するなど

工夫がほしかった。坂出市役所の「さかいで１３１おとめ隊」は、オリジナルの防災ポーチを携帯していたが、どの程度の災害を想定した中身なのか気になった。また、女性目線での防災を特集するにあたり、スタジオには女性ゲストを招いたほうがトークも盛り上がったのではないか。四万十川の話題では、川釣りが紹介されていたが、漁期や漁業権に決まりがあるため、もう少し詳しい説明がほしかった。また、テロップで「キロ」と表示されているにもかかわらず、音声は「キロメートル」となっておりずれが気になった。ゲストの秋川さんは、イヤホンセットが机の上に置かれ配線がむき出しになっており、目についた。

○　ニュースや天気予報のほか、四国各地の話題がバランスよく構成され、新しい気づきが得られる番組だと思う。また、毎週異なる四国出身の著名人をゲストに迎えることで、楽しく視聴を続けられるよう配慮しているように感じた。坂出市役所の「さかいで１３１おとめ隊」や西条市の女性防災士の取り組みは、いずれも女性ならではの感性や視点を活かし、防災を特別なものとせずに、日常生活に組み込むことを意識している点が印象的だった。男性だけでは、毎日持ち歩く防災ポーチを作成することや簡易トイレに装飾するという発想は出てこないのではないかと思った。高知県津野町を流れる四万十川流域の話題では、自然を後世に残したいという意識を持ち続けている地域の住民に頭が下がる思いだった。

○　大型連休の最初の朝にふさわしく、さわやかな仕上がりで、４月から起用されている宮本アナウンサーと田中気象予報士も好感が持てた。番組の各コーナーは、時間配分も適度で、テンポよく進められていた。「ギュッと！気にナル」では、坂出市役所と西条市の防災教室の取り組みを紹介していたが、大変興味深い内容だったため、「四国らしんばん」などの番組で、他地域の取り組みも含めて詳しく紹介してもよいのではないかと思った。「ギュッと！であい旅」は、四万十川の清流を守っている取り組みが、地元の人の声を交えながらよく伝わってきた。丁寧に取材をし、図解を用いて理解しやすくなるよう努めていることもよかった。「ハッとホッとナビ」は、コロナ禍という事情も理解できるが、各地で徐々にイベントも再開しているため、お出かけ情報がほしかった。天気予報のコーナーでは、季節にあわせた雑学を楽しむことができた。２年前の番組開始当初と比べ内容も充実し、よい番組になっていると思う。

（ＮＨＫ側）

坂出市の「さかいで１３１おとめ隊」は、市のホームページに活動内容を掲載するほか、地域の親子向けに防災教室を開くなどの活動をしている。また、市の職員の中で防災知識を蓄えたリーダーを増やしていき、ひいてはその職員が地域に還元していくことを目指

している。女性ゲストのほうが適切だったのではないかという指摘については受け止めたい。「ギュッと！であい旅」は、好意的な意見をいただいたが、「であい旅」というコーナー名に合うよう、もっと旅情感を含めてもよかったと考えている。今後は、生放送番組という特徴を生かし、タイムリーな話題をすぐに特集するなど、チャレンジを続けていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　４月２２日(金）のノルノルミシル！「愛媛・南予　バスの旅」（前編）を見た。昨年１１月に特集番組として放送された際は、２５分の放送時間内で５か所をめぐり、慌ただしい印象を受けたが、今回は前後編に分けたことでゆったりとした構成になっていて、落ち着いて楽しむことができた。タレントのユージさんが訪れたいずれのスポットも、南予地域ののどかさを味わえるものでよかった。

○　同じく、４月２２日(金）の「ノルノルミシル！」を見た。ユージさんやナレーションの島本須美さんの柔らかい語り口に好感を持った。全体を通して、地方ならではののんびりとした雰囲気がよかったが、ユージさんと地域の人々との会話など、ふれあいがもう少しあったらよかった。また、このような旅番組を見るとき、道幅や段差の有無が気になる高齢者や体の不自由な視聴者もいると思う。足元を意識して映したり、ナレーションやテロップで「ノンステップバス」などの詳細な情報を表示したりすれば、幅広い視聴者に親切な番組になるのではないか。

○　同じく、４月２２日(金)の「ノルノルミシル！」を見た。地元バス会社社員へのアンケートで募集した地域のおすすめスポットを紹介していたが、初めて知ることが多く楽しく視聴した。まだまだ知られざる愛媛県の楽しみ方があると知り、いま一度地域の文化や魅力を見つめ直してみたいと思った。ユージさんの進行は明るく安定感があり、安心して見ることができた。次のバスが到着するまでの時間を有効に活用し、その間に地元の名物を食べるなど不便さを逆手に取る新しい旅の楽しみ方だと感じた。

○　同じく、４月２２日(金)の「ノルノルミシル！」を見た。田舎ならではの素朴さが伝わる内容でよかった。中でも、宇和島市九島の昭和３８年ごろの段々畑の映像は、とてもインパクトがあった。また、ユージさんがおいしそうに、みかんジュースや「べたもち」を食べている場面が印象的だった。全体を通して、ユージさんの優しい人柄が伝わってきた。

○　３月１８日(金)の「四国あるある選手権２（リターンズ)」は、一つ一つの「あるある」がとても納得できるもので、本当に楽しく視聴した。秋川さんの登場はとても驚いたが、うれしく思った視聴者は多いと思う。

○　同じく、４月２２日(金)の「ノルノルミシル！」を見た。昨年１１月に特集番組として放送した回と比べ、前後編に分けたことで、車窓からの風景や地元の人とのふれあいを紹介する時間が増え、旅の楽しさが伝わってきた。特に、バスの乗り換え時間が長いことを逆手にとり、地元のグルメを紹介していた点がよかった。おすすめスポットとして、ややマニアックなラジコンカー専用サーキットを取り上げたことには疑問があったが、宇和島市の九島に伝わる「べたもち」を紹介したのは有意義だったと思う。このような地域に根ざした伝統料理を「ギュッと！四国」などの他の番組でも紹介し、継承に取り組んでほしい。

○　５月１日(日）の四国あるある選手権２　ＳＰ(総合 後 1:10～1:53 四国ﾌﾞﾛｯｸ)を視聴した。３月１８日(金)に放送された２５分版も視聴したが、今回はその拡大版ということで、さらに楽しむことができた。あるあるを紹介する替え歌の中に登場した特産品の紹介や、一つ一つのあるあるに対する掘り下げもおもしろく満足感があった。第３弾の放送があれば、ぜひ拡大版で見たい。

○　５月７日(土）に再放送されたランスマ倶楽部 選「ふるさと自慢！ご当地ＭＹたまランコーススペシャル」を見た。愛媛県出身で女子マラソン日本代表としてオリンピックに出場した土佐礼子さんが出演していたので、楽しみにしていた。土佐さんと市民ランナーが、松山市の道後公園から石手寺、道後温泉、松山城をめぐり、風景や歴史、食べ物などを紹介しており、土佐さんのコメントも楽しく、実際に今回のコースをたどってみたいと思わせてくれる内容だった。
「ノルノルミシル！」では電車やバス、「前園真聖　四国ともたび」では自転車と、さまざまな移動手段で地域の魅力を紹介する番組が増えていると感じている。移動する手段によって、見える景色や地域の人との触れ合いも異なるため、引き続きこうした番組を通して、さまざまな角度から知られざる四国の魅力を伝えてほしい。

○　５月９日（月）に、災害時に車中泊避難に対応する訓練が美馬市で行われたというニュースを見た。これから梅雨の時期となり水害が増えてくる前に、タイムリーな訓練を伝えていた。災害時に車中泊をすることで発症するエコノミー症候群の予防や、マンホールの上に直接トイレを設置するマンホールトイレ、駐車場に設置されているベンチを活用したかまどなど幅広く紹介されていた。ふだんから車中泊に備えた準備が大切だと改めて認識させられた話題だった。

○　５月１３日（金）の四国らしんばん「俺が撮る介護の“リアル”～ある写真家が見つめた介護最前線～」を見た。愛媛県在住の写真家・野田明宏さんの特集だった。介護現場の厳しい面ばかりではなく、前を向ける番組になっており、本当によい番組だった。野田さんが介護写真を撮影するようになった経緯もとても分かりやすく伝えられていた。昨年４月３日(土)の「ギュッと！四国」のコーナー内で野田さんが紹介されていたものと比べ、今回は、野田さんのパートナーの存在や、リハビリを頑張っている男性との交流など、前向きな場面も多く温かい気持ちになった。舞踏家の田中泯さんのナレーションも、心にしみいるようで非常によかった。

○　同じく、５月１３日(金)の「四国らしんばん」を見た。介護現場の厳しい状況が伝わってくる写真や、野田さん自身の苦しい体験などつらく感じる部分もあったが、野田さんの努力や愛情も伝わってきた。田中泯さんの落ち着いた深みのあるナレーションがとても効果的だと思った。ふだん介護になじみがない視聴者にとって、実態を知る機会は限られているため、このように番組で取り上げることの重要性を改めて感じた。

○　同じく、５月１３日(金)の「四国らしんばん」を見た。介護というテーマだけに、不安な気持ちを抱きながら視聴したが、目を背けるのではなく、踏み込んで現実を見る勇気をもらえるような番組だった。野田さんと、撮影される高齢者が信頼関係を築くまでの過程が気になった。また、今回の番組制作にあたり、ＮＨＫ側と、野田さんをはじめとした関係者の方々の間にも大きな信頼関係があると感じた。どのように関係を築いたのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

野田さんは、長いところでは１０年以上同じ施設に通い、入居者やその家族、職員と信頼関係を構築してきたと聞いている。今回の番組制作にあたっては、ＮＨＫ側も事前に入居者や家族、施設職員と話合いを重ね、撮影に臨んだ。

○　アニメ「アオアシ」は、毎週楽しみに視聴しているが、主人公の母親や兄が話している伊予弁のイントネーションに違和感があり気になっている。

また、大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」は、史実と俗説の織り交ぜ方が巧みで、とても楽しく視聴している。ドラマでは全く問題ないと思うが、「歴史探偵」では、史実と俗説をはっきりと区別して紹介してほしい。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局

２０２２年４月ＮＨＫ四国地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ四国地方放送番組審議会は、１８日（月）、東京第一ホテル松山において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、事前に視聴してもらった四国らしんばんスペシャル「グレートニッチⅢ～『社会課題』に挑む四国企業」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、５月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	半井　真司	（四国旅客鉄道代表取締役会長）
副委員長	三好　賢治	（伊予銀行代表取締役頭取）
委　員	阿部　和孝	（松山市農業協同組合 代表理事組合長）
	上月　康則	（徳島大学環境防災研究センター長）
	小松　圭子	（有限会社はたやま夢楽　代表取締役社長）
	田井ノエル	（小説家）
	前本　千恵	（三浦工業株式会社 ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）学芸員）
	三木千佳子	（徳島県邦楽協会会長）
	皆見　信博	（パラ卓球選手）
	村上健太郎	（特定非営利活動法人ＮＰＯ砂浜美術館理事長）

（主な発言）

＜四国らしんばんスペシャル「グレートニッチⅢ～『社会課題』に挑む四国企業」（総合　４月８日(金)放送）について＞

○　松山局の永井伸一アナウンサーによる熱のこもった進行で楽しく見ることができた。大企業が目をつけなかったニッチな分野でトップを目指すという視点は、地方に住んでいる者にとっては大事なものだと思った。紹介されたどの企業も、社会問題を解決するだけでなく、ビジネスとしてしっかりと成り立っている点も印象的で、事業を拡大させて行く過程には思わず拍手が出た。それぞれの未来に向けた明るい取り組みか

らは、元気をもらうことができ、視聴後は温かい気持ちになった。出演者のコメントも分かりやすく、共感できるものだった。今後も、今の時代に漂う閉塞感(へいそくかん)を打破できるような取り組みを紹介する番組を期待したい。

○　４３分間のスペシャル版は、とても見応えがあった。タクシーの配車システムを開発した、徳島市のＩＴ企業の近藤洋祐社長と、高松市で中古学生服の販売会社を創業した馬場加奈子さんがスタジオにも出演し、ゲストで芸人のヒコロヒーさんや、京都先端科学大学の増山壽一特任教授と話を深めていたことも、番組を充実したものにさせていた。ただ取り組みを紹介するだけではなく、ニッチな分野で成功を収める企業が四国で生まれる理由について、増山特任教授が分かりやすく解説していた点もよかった。紹介された４つの企業のなかでも、わずか５０着の学生服からビジネスを始めたという馬場さんの実行力には驚かされた。また、高知市で強力吸引作業車を製造する北村和則常務の「ユーザーニーズの中にヒントがある」などのことばはとても印象的だった。今回各企業が挑んでいた社会課題は、四国の多くの市町村が直面しているものだ。「四国らしんばん」が持つ目の前の課題に向き合うという視点のほかに、今後５年、１０年先の展望も番組の中に込めてほしい。

○　多くの人々に役立つ可能性を秘めている企業が、四国にもあるということを伝えたとてもよい番組だった。強力吸引作業車を「掃除機のお化け」と例えた北村常務の冒頭のコメントはユーモアがあり、楽しく視聴した。タクシーの配車システムを開発したＩＴ企業は、近藤社長が運転手を経験し、現場を知っていたからこその発想だと思った。これからのさらなる発展を感じさせ、とても期待を持てた。高松市で中古学生服の販売会社を創業した馬場さんの「自分が必要だったから立ち上げた」という行動力にただ驚いた。子育て家庭の相談を受け、行政などと連携していく取り組みも今後より詳しく取り上げてほしいと思った。「誰もが働ける場所づくり」に向けて、愛媛県新居浜市で食堂を運営する藤田敏子社長のことばは、どれも強い思いを感じさせるもので心に響いた。障害者の雇用にあたっては、課題も多いため、別の番組でも詳しく取り上げてほしい。ゲストの増山特任教授は、専門用語をなるべく使わず、分かりやすく丁寧にコメントしていて、好感を持った。

○　ニッチで高いシェアを誇る四国の企業の存在や、アイデアと行動力に驚かされた。強力吸引作業車は、吸引力を実演した映像のインパクトが非常に大きかった。災害復旧の課題に挑む頼もしい企業が四国にあることを誇りに思った。タクシーの配車システムを開発した近藤社長は、若いながらもコメントに説得力があった。現場のデジタル化が遅れているとの実感から改革を進める行動力には感心した。高齢化や人口減少は全国的な課題であり、乗り合いタクシーへのシステムの導入は、今後も期待される

取り組みだと思った。中古学生服の販売会社は、創業者の馬場さん自らが３人の子育てをした経験から生まれた発想だった。アイデアを実行に移す力強さと、困っている人を支えたいという優しい気持ちがあるからこそ乗り越えることができたのだと思った。起業にあたっては、地方だからこそ課題に気づきやすいという面も確かにあると思うが、今回の社長や創業者のように熱意と優しい気持ちがあってこその成功だと思った。

○　大変興味深く視聴した。番組では、４つの地域の課題が取り上げられていたが、いずれの課題に対する取り組みも期待以上に充実していた。私は番組を３度見たが、何回見ても楽しむことができる内容だと思った。一方で、地域の課題や解決方法をもっと詳しく知りたいと思った視聴者も多いと思う。一つの番組にまとめるのではなく、各テーマを４回に分けて放送してもよかったのではないか。今回、各企業が挑んでいた課題は、四国だけではなく、全国に共通したものであるため、広く視聴してもらうことで、ほかの地域の行政や企業にも夢と希望を与えることができると思う。特に、学校現場でも子どもたちに見てもらい､話し合う学習にも活用できる内容だと思った。全国放送に展開するなど、多くの人に見てもらう機会を設けてほしい。

（ＮＨＫ側）

新年度１回目の「四国らしんばん」ということで、通常２５分の番組を今回は４３分に拡大した｡「グレートニッチ」ということばは、いわゆる大企業がなかなか参入してこない隙間産業で圧倒的なシェアを誇る四国の中小企業を指す私たちの造語で、過去２回はメーカーのみを紹介したが、今回は独自の発想を持って社会にインパクトを与えている飲食店や、ＩＴ企業も取り上げた。タクシーの配車システムを開発した徳島県の企業と、高松市の中古学生服の販売会社は、どちらも四国発のビジネスで、現在は全国に展開している。４３分という長い時間の中で、社会課題という堅いテーマを、どのようにしたら身近に感じてもらえるかを悩みながら制作した。冒頭では、マネキンを使って取り上げるテーマを紹介するなど伝え方を工夫したほか、映像にインパクトがある強力吸引作業車の紹介から始め、内容も徐々に身近な問題に落とし込むという構成にした。

○　新年度に向けて元気が出るようなテーマだった｡「グレートニッチ」という造語の語感もよく、頭に残りやすい。課題が書かれたパネルをマネキンに持たせるというスタジオセットも、想像力を生むような演出だと感じた。紹介地域のバランスもよく、視点も性別も全く違う立場の事業者を紹介しており、 各取り組みに対しての映像資料、

利用者へのインタビューも豊富で、それぞれの現場の様子がよく伝わってきた。タクシーの配車システムは、最新技術が四国に合った形で活用されており、地元に適したものはやはり地元から生まれるのだと感じた。知的障害者の雇用を支援する新居浜市の食堂では、店内の盛況ぶりがよく伝わってきた。藤田社長のことばからも熱意が感じられ、今後、障害者が身近で一緒に働く社会への期待が高まるような内容だった。どの取り組みからも熱い思いが伝わり、地域の課題解決のためには、地域の現状を地域ならではの距離感で知っていくということが大切だと思った。

○　強力吸引作業車の紹介は、吸引力を示す実演が化学実験のようで楽しく、番組の冒頭に持ってきたことで、視聴者をひきつけることができたのではないか。顧客のニーズに応えることから新しい事業につながり、現在では災害現場の復旧作業に役立っている点は興味深かった。タクシーの配車システムは、現在に至るまでに大変な苦労があったと伺えたが、デジタル化が遅れている業界で見事にシステムを構築していた。中古学生服の販売会社創業者の馬場さんからは、たくましさを感じた。ただ、中古の制服のメンテナンスをどのような仕組みで行っているのか、もう少し説明があればよかった。知的障害者や高齢者も働ける環境を積極的につくる新居浜市の食堂は、自分のペースでできる作業や、得意なことを見極めて仕事を割りふっており、とても理解のある職場だと思った。番組後半に進むにつれて、話題が身近になっていくという構成もよかったと思う。

○　新年度のスペシャル番組として、内容も構成も十分よかったと思う。人口減少や、コロナ禍など、厳しい状況がある中で、地方でも前を向ける勇気をもらえる番組だった。強力吸引作業車の実演は視覚的で、とても分かりやすく、画面越しでもその力強さを感じることができた。タクシーの配車システムについては、４０都道府県で利用が広がっているというニーズの高さに驚いた。公共路線にも活用が広がっており、住民・行政・企業の三者にメリットがありすばらしいと思った。中古学生服の販売会社は、全国に９６店舗を展開しているとのことだったが、どのように店舗を広げていったのか説明がほしかった。知的障害者や高齢者の雇用に取り組む藤田社長の姿には勇気をもらうことができた。食堂で働いている山内康平さんと母親のインタビューも心が温まりすてきだった。

○　強力吸引作業車を製造する高知市の企業は、現在の立ち位置に満足することなく、常に向上心を持って進化し続けようとしている姿勢がすばらしいと感じた。タクシーの配車システムを開発したＩＴ企業は、地域の足の確保に悩んでいる自治体からも注目を集めており、地方の過疎化が問題となっている中でさらに成長をしていってほしいと思った。中古学生服の販売会社は、高額の学生服の購入に困っている子育て世代

を支えることに取り組んでいた。コロナ禍でますます高まる需要に応えつづけてほしい。社会課題の解決とビジネスを両立させるという大変参考になる事例で、まさしく「グレートニッチ」だと感じた。四国は都市部と比較して人間関係が構築しやすいため、人との関わりの中で得られる気づきが多いなどのメリットがあると思った。引き続きグレートニッチの紹介や、全国に向けて認知度の向上に取り組んでほしい。

○　四国から全国に展開している４つの企業について、成功の秘けつや誕生の背景を解説した番組だった。これから起業を目指す人にも参考になる内容だと思った。２人の社長がスタジオに出演したり、永井アナウンサーの現地取材を織り交ぜたりしたことで、説得力のあるものとなっていた。ヒコロヒーさんと増山特任教授のコメントも的確で分かりやすかった。強力吸引作業車を製造する会社は、取引先の顧客ニーズに合わせたオーダーメイドで、商品の付加価値を高めて市場を広げていた。タクシーの配車システムを運営するＩＴ企業は、近藤社長の問題意識からシステムを開発し、同じ課題を抱えるタクシー会社に受け入れられ、全国展開に至っていた。公共交通の維持に困っている行政にも広まりつつあるという点は興味深かった。中古学生服の販売会社は、創業者の行動力に驚かされた。ただ、全国展開が難しい業態であると思われるため、経緯や仕組みをもう少し詳しく紹介してほしかった。高齢者や障害者の雇用を進める会社は、周りが支えながらも、各々のペースで仕事ができる職場環境作りを進めており、藤田社長の経営理念はすばらしいと感じた。全国に比べて課題を多く抱える四国だからこそ新たなビジネスが生まれる可能性があるということをうまく伝えていた番組だった。

（ＮＨＫ側）

番組の放送時間を４３分にしたことで、スタジオでのトーク場面に多くの時間を割くことができたことが大きかった。２人の社長をスタジオに招いたが、通常の２５分の放送時間では取り上げられないような、学生時代のエピソードも織り交ぜ、人柄にも迫ることができた。さらに、ヒコロヒーさんから出演した社長へ、あるいは増山特任教授から別の社長へ質問するなど、活発な掛け合いが行われたこともトーク場面の充実につながった。これからも、四国に暮らしていることを誇りに感じられるような番組を作っていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月後半にかけて、四国の魅力を紹介し、四国を盛り上げていこうという番組が、

相次いで放送され、大変うれしく思っている。３月１８日(金)の「“新絶景”を探そう！～タイムラプスで撮る四国～」（総合 後 7:30～8:13 四国ﾌﾞﾛｯｸ）は、大変おもしろい試みだった。日ごろ見慣れた光景が、全く違ったものに見えてくるというタイムラプスの魅力を、存分に味わうことのできる番組だった。中でも、愛媛県のＪＲ下灘駅の作品が印象的だった。昼間の様子はよく知っていたが。夜にはこんなにきれいに見えるのかと感動した。今回のどの映像も、国内外に広く発信してほしい。

○　同じく３月１８日(金)の「“新絶景”を探そう！～タイムラプスで撮る四国～」を見た。新聞のテレビ欄で、この番組に色がついていたことで目にとまり視聴した。オープニング映像がとても魅力的で、すぐに目がくぎづけになった。コロナ禍で県外への観光を自粛する人が多い中で、このような番組はとてもよいと思った。また、タイムラプスの撮影方法の解説も分かりやすかった。ただ、一つ一つの作品に対する説明は、もう少し時間を取ってもよかったと思う。また、タイトルに「新絶景」とついていたが、ふだんからよく知られた観光スポットで、新しいものではなかったため、やや違和感を覚えた。

○　同じく、３月１８日(金)の「“新絶景”を探そう！～タイムラプスで撮る四国～」を見た。新しい切り口で、四国を楽しむよい番組だった。四国内にこんな場所があるのかと発見も多く、映像もきれいだった。最近では、風景を見るだけではなく、風景を撮影して発信することを目的に旅する人が増えていると思う。そのため、撮り方のポイントの解説もあってよかった。番組後半では、定点ではないタイムラプスの使い方や、工場夜景、伝統行事の記録など、自然の風景とは違う切り口の活用も紹介されていて新鮮だった。

また、この番組に続けて３月１８日(金)の「四国あるある選手権２（リターンズ)」（総合 後 8:15～8:42 四国ﾌﾞﾛｯｸ）を見た。初めて聞く「あるある」が多く、まだまだ四国の楽しみ方があるように感じた。どちらの番組も、四国を楽しむ目的が共通しており、２つの番組が連続して放送されたことで、四国の番組を積極的に発信していこうということが感じられた。新番組の「ノルノルミシル！」や「前園真聖　四国ともたび」など今年度はさらに四国を楽しむ番組が充実しており、いろいろな切り口、キャストで、楽しめる番組をこれからも期待したい。

○　同じく３月１８日(金)の「四国あるある選手権２（リターンズ)」を見た。手作り感のある素朴な雰囲気ながらも各県の完成度が高く、時間があっという間に感じられた。同じ四国でも、意外と知らないことも多く、驚きがあり、とても楽しく視聴した。ゲストで芸人の井上裕介さんや、愛媛県代表として出演したテノール歌手の秋川雅史さんの人選もよく、見応えがあった。番組ホームページでは、スペシャルトークなどの

動画コンテンツが充実していて、２度楽しむことができた。このようなページがあることを番組内でも紹介してほしいと思った。

○　３月１８日(金)の「四国あるある選手権２（リターンズ)」は、一つ一つの「あるある」がとても納得できるもので、本当に楽しく視聴した。秋川さんの登場はとても驚いたが、うれしく思った視聴者は多いと思う。

○　３月１８日(金)の「四国あるある選手権２(リターンズ)」はとても楽しく視聴した。視聴者から寄せられた「あるある」がとても充実していたほか、選曲や出演者も適切で、前回に比べて仕上がりが各段によくなっていた。第３弾も期待したいが、その際は讃岐うどんや、愛媛のみかんといった定番のものは封印し、新たな「あるある」を楽しみにしている。

３月２５日(金)の「瀬戸内×アート　瀬戸芸とわたし～のんがめぐる　早春アート旅～」（総合 後 7:30～8:13 四国ﾌﾞﾛｯｸ）を見た。４月に開幕した瀬戸内国際芸術祭に先立ち、その魅力を紹介する番組だった。今回の番組では、俳優ののんさんが島をめぐり、アートの紹介とともに、作家や島民との交流を通して、瀬戸内国際芸術祭の本来の魅力をうまく伝えていたと思う。のんさんの落ち着いた語り口もよく、視聴者を瀬戸内国際芸術祭にいざなうよい仕上がりになっていた。春夏秋の会期の節目ごとに、このような番組を制作してほしい。

○　３月３０日(水)の「とく６徳島」で、徳島城のイベントでの新型コロナウイルス対策の話題では、取材者が徳島をしっかりと見つめ、応援しようとしてくれているという気持ちが伝わってきた。これからも、今回のように地元を応援していることが感じられるような発信をしてほしい。

また、新年度をむかえ、新たに着任したアナウンサーが活躍していくことを楽しみにしている。１月の「あわとく」のように、徳島局のアナウンサーを軸にした番組をまた見てみたい。

○　４月７日(木)のニュース「“生活困窮”どうする？複雑化する相談」を見た。静岡市の社会福祉協議会による生活困窮相談の取り組みが紹介されていた。相談件数増加に伴い、相談内容が複雑化している実情と、こうした問題を解決するために別々の機関で働く専門家が集結し、複雑化した問題に一度に対応する「なんでもかんでも相談会」を設けたことが紹介されていた。このように産学官民さまざまな専門家がグループとなって、問題解決にあたることは、災害後の被災者支援でも必要とされている。被災すると住まい、経済、仕事、福祉、教育、健康など、さまざまな問題を抱えてしまう。今回のような「なんでもかんでも相談会」のような仕組みづくりを今から備えておけ

ば、大災害が起こった際に、非常に有効であると考えている。多くの人にこの取り組みを知ってほしい。

○　４月８日(金)の「ぼくらはマンガで強くなった　もうすぐアオアシ～ふるさと・愛媛とともに～」（総合 後 8:18～8:43 四国ﾌﾞﾛｯｸ）を見た。愛媛県出身の主人公が活躍するサッカー漫画「アオアシ」について知らない人でも、この番組見れば、アニメを見たくなるような番組だった。実際に４月９日(土)のアニメ　アオアシ（１）「ファーストタッチ」も視聴した。愛媛県のみならず、サッカーファンや、小中学生に向けた告知にもっと力を入れ、幅広い層に見てもらえるようにしてほしい。

○　同じく、４月９日(土)のアニメ　アオアシを視聴した。原作のファンで、以前から期待していたが、とてもよい仕上がりだった。これからも期待している。

○　４月１３日(水)の「あさイチ」を視聴した。「子宮タイムライン」と題し、子宮に関する病気を防ぐ対策を、年代、症状別に紹介する内容だった。今回は、歌手の大黒摩季さんをゲストに迎え、医師の解説も交えながら深掘りしていた。病気を経験した方へのインタビューも多く、より現実味を持って考えることができた。ＮＨＫでは、さまざまな番組で性について取り上げていて、大変勉強になっているが、今回も女性視聴者が多い「あさイチ」で放送しておりよかったと思う。

○　４月１５日(金)のひめＤＯＮ！「ＳＤＧｓ生活、実験してみた。」を見た。ＳＤＧｓについて、日常生活ではなかなか意識できずにいたため、興味深いテーマだった。アイドルと芸人が実験に取り組むという組み合わせも､気軽に見ることができよかった。ＳＤＧｓについて、実際の生活の様子とともに学ぶことができ、番組を通して一気に身近に感じられた。一見、難しいと思われがちなテーマだが、易しくかみ砕かれ、とても分かりやすかった。生活期間をもっと伸ばしたり、加点・減点方式にして勝負したり、企画に変化をつけても楽しそうだと思った。職業も年齢もさらに多様な立場の人の取り組みも見てみたいと感じた。今後もＳＤＧｓを身近なものに感じられるような企画に期待したい。

○　４月１７日(日)の大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」は、今までの放送の中でも特によかった。上総広常の死について、同じ場面を描いた書籍を複数読んだことがあるが、ドラマでここまできれいに描くとは、打ちのめされたような衝撃を受け、とても心が震えた。本当によい回だった。

○　新年度からの「ひめポン！」は、雰囲気が変わり新鮮だ。新しいロゴもスマートな

デザインで気に入っている。

○　新年度からの「ひめポン！」は、デザインやオープニング映像、音楽などが変わり、全体的におしゃれで洗練された雰囲気になっていて、とてもよいと思った。４月７日(木)から始まった新コーナー「あの日めぐり」もよかった。モノクロ映像をカラーにする技術自体は、以前から目にする機会はあったが、今回は道後温泉という身近な場所の映像だったため、楽しく視聴した。当時の映像に映っていた人に話を聞くことで、時の流れを感じることもでき、これまで引き継がれてきた伝統の祭りを、より大切に感じることができた。今後も楽しみにしたい。

この春から「ひめポン！」をＮＨＫプラスで視聴できるようになり、とても便利だ。地域のニュースは毎日見たいが、決まった時間にテレビの前にいるのは難しいため、活用している。四国の他県のニュース・情報番組が配信されていないのはなぜか気になった。

また、「ひめポン！」に限らず、番組内や公共メディア通信にＱＲコードを掲載し、直接投稿ページに接続できるようにしていることが多くあるが、投稿ページ内に番組情報へのリンクもほしい。投稿目的ではなくても、その番組の情報を知りたいと思い、ＱＲコードを読み込む人も多くいると思う。

（ＮＨＫ側）

夕方１８時台のニュース・情報番組のＮＨＫプラスでの配信は、四国ではこの４月から拠点局である松山局のみ開始したが、今後随時、ほかの地方局でも配信を開始していく予定だ。

ＮＨＫ松山放送局
番組審議会事務局